

高松市立林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

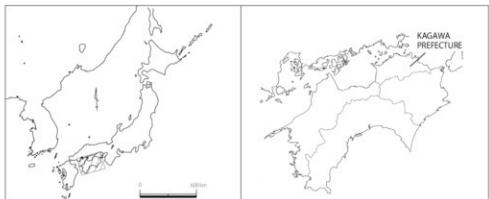
2010年3月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、林宗高遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は、次のとおりである。

調　　査　　地	高松市林町	高松市立林小学校地内
調査期間	平成21年4月13日～6月6日	
調査面積	430m ²	
- 3 現地調査は、高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員 高上拓が担当した。
- 4 整理作業は高上が担当した。
- 5 本報告書の執筆・編集は高上が担当した。
- 6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
高松市立林小学校
- 7 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 8 出土遺物の実測図は、土器やその他土製品等は1/4、遺構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で、土師質土器は断面白抜き、須恵質土器は断面黒塗り、縁釉陶器はアミカケで表す。また、石器実測図中で現代の折損は黒で塗り潰している。
- 9 プラントオバール分析および花粉分析を株式会社パリノ・サーヴェイに、遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。



目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	1
第2節 周辺における既往の調査	1
第3節 調査日誌	4
第4節 整理作業の体制と日程	4
第5節 林小学校生徒による 発掘調査体験・現場見学	5
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 調査方法	9
第2節 調査区の概要	9
第3節 基本層序	10
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 幼生時代	14
第2節 古代	30
第3節 近世以降	41
第V章 自然科学的分析	
第1節 プラント・オパール分析	44
第2節 花粉分析	48
第VI章 まとめ	
第1節 古代の遺構と調査地帯付近の地割	53
第2節 土地利用の変遷	55

挿 図 目 次

Fig. 1 林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図	2
Fig. 2 高松平野の地形図と遺跡位置図	7
Fig. 3 調査区配置図	9
Fig. 4 掘乱層出土物	10
Fig. 5 調査区北壁・南壁断面図	12
Fig. 6 Fig. 4～H1 層出土遺物	13
Fig. 7 出土層位不明遺物	13
Fig. 8 SRI 下層出土状況	15
Fig. 9 SRI 下層出土物①	17
Fig. 10 SRI 下層出土物②	18
Fig. 11 SRI 下層出土物③	19
Fig. 12 SRI 下層出土物④	20
Fig. 13 SRI 下層出土物⑤	21
Fig. 14 SRI 下層出土物⑥	22
Fig. 15 SRI 下層出土物⑦	23
Fig. 16 SRI 下層出土物⑧	24
Fig. 17 SRI 下層出土物⑨	25
Fig. 18 SRI 下層出土物⑩	26
Fig. 19 SRI 下層検出中出土土器	28
Fig. 20 SRI 下層検出中出土土器	29
Fig. 21 第1遺構面および遺構検出状況	31
Fig. 22 SRI 上層（第1遺構面）出土遺物	32
Fig. 23 SAI 平・断面図	33
Fig. 24 SB1 平・断面図	34
Fig. 25 SD1～4 平・断面図	36
Fig. 26 SD5～8 平・断面図	37
Fig. 27 手土手遺構平・断面図	38
Fig. 28 土块・ピット出土遺物	39
Fig. 29 土块・ピット平・断面図	40
Fig. 30 近世以降遺構平・断面図	42
Fig. 31 近世以降遺構配図	43
Fig. 32 林宗高遺跡における プラント・オパール分析結果	44
Fig. 33 林宗高遺跡における花粉ダイアグラム	49
Fig. 34 調査区の標高と地形の変化	54
Fig. 35 調査地周辺の微地形復元図	
林宗高遺跡位置図	55
Fig. 36 工事立会対象地の調査範囲	
調査地周辺の微地形復元	56

挿 表 目 次

Tab. 1 整理作業工程表	4
Tab. 2 基準点座標一覧表	9
Tab. 3 プラント・オパール分析結果	46
Tab. 4 花粉分析結果	51
Tab. 5 出土遺物観察表	58

図 版 目 次

PL. 1 遺構説明の様子	
PL. 2 発掘調査体験の様子	
PL. 3 植物珪酸体（プラント・オパール）	
PL. 4 林宗高遺跡の花粉	
PL. 5 弥生土器集合	
PL. 6 1. 第1遺構面全景（北から） 2. 第1遺構面東側遺構検出状況（北から） 3. 第1遺構面西側遺構検出状況（北から）	
PL. 7 1. 第2遺構面検出（北から） ※ピットは上面からの掘込 2. SR 1 遺物集中（北西から） 3. SR 1 遺物集中（南から）	
PL. 8 1. SR 1 遺物出土状況①（南から） 2. SR 1 遺物出土状況②（南から） 3. SR 1 遺物出土状況③（南から） 4. SR 1 遺物出土状況④（南から） 5. SR 1 遺物出土状況⑤（南から） 6. SR 1 遺物出土状況⑥（東から） 7. SR 1 完掘状況（北西から）	
PL. 9 1. 調査区北壁東半断面（南から） 2. 調査区北壁西半断面（南から） 3. 調査区南壁西半断面（北から） 4. 調査区南壁東半断面（北から） 5. 調査区東壁半断面（南西から） 6. 調査区西壁断面（南東から） 7. 近世以降の擾乱層（南西から） 8. 調査区東壁断面（北西から）	
PL. 10 1. SD 1・2 完掘状況（南から） 2. SD 3・4 完掘状況（南から） 3. SD 5・6 完掘状況（南から） 4. SD 7・8 完掘状況（北から）	
PL. 11 1. SD 1 断面（南から） 2. SD 2 断面（南から） 3. SD 3 断面（南から） 4. SD 4 断面（南から） 5. SD 5 断面（南から） 6. SD 6 断面（南から） 7. SD 7 断面（南から） 8. SD 8 断面（南から）	
PL. 12 1. SX 2（土手状遺構）検出状況（南から） 2. 調査区北壁検出SX 2 断面 3. 調査区南壁検出SX 2 断面	
PL. 13 1. 級縞陶器出土状況 2. 土鍤出土状況 3. SX 1 断面（南から） 4. SX 1 完掘（南から） 5. 北括張区第1遺構面遺構検出状況 （南から）	
PL. 14 1. SR 1 下層削断面（西から） 2. SR 1 下層削断面北壁断面（東から） 3. SR 1 下層削断面南壁断面（西から） 4. 北括張区全景（北東から） 5. 北括張区全景（南から） 6. 北括張区西壁断面（南東から） 7. 北括張区東壁断面（南西から） 8. 調査終了後風景（西から）	
PL. 15～19 出土遺物写真	

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本調査地は、高松市立林小学校新校舎建設予定地にあたる。本市教育委員会総務課（以下教委総務課と呼称）により、当地での校舎建設事業が計画されたため、本市教委文化財課が着工に先立ち平成20年7月28日に試掘調査を実施した。その結果、弥生時代を中心とした時期の埋蔵文化財の包蔵を確認したため、香川県教育委員会に報告したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」として登録された。平成21年度に校舎建設工事に着工する予定であったため、平成21年2月5日付けで埋蔵文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、本市教委から県教委へ進達したところ、同月17日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて文化財課は教委総務課と協議を行い、校舎建設前に発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意したため、平成21年4月14日から同年6月6日にかけて、発掘調査を実施した。

また発掘調査開始前に、校舎建設の付随工事をある渡り廊下建設予定地においても掘削工事を実施する旨の報告を教委総務課より受けたため、6月4～6日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、南側においては埋蔵文化財の包蔵状況を確認したが、北側は既設のガス管・配水管などが縦横に配置されており、埋蔵文化財の包蔵状況を確認することはできなかった。この試掘調査の結果を県教委に報告したところ、渡り廊下建設予定地の南側は新たに埋蔵文化財包蔵地として登録され、北側については渡り廊下の建設工事時に「工事立会」の対応をとるようについて行政指導を受けた。これに基づき7月29日に工事立会を実施した結果、ガス管等既設の構造物すでに大きく削平されており、埋蔵文化財の包蔵状況は確認できなかった。

以上の経緯をまとめると、今回の調査はまず周知の埋蔵文化財包蔵地である新校舎建設予定地に対する発掘調査を行ったのち、渡り廊下建設予定地の南側は試掘調査で、北側は工事立会でそれぞれ必要な記録保存措置をとることとなった。なお、渡り廊下建設予定地北側で実施した工事立会の内容については埋蔵文化財包蔵地とは認められなかったため、本書には掲載していない。

第2節 周辺における既往の調査

林宗高遺跡は行政区画としては林町1108番地1に所在し、地勢的には高松平野中央部のやや南東よりに位置する。本遺跡の周辺では、近年、高松東道路建設事業や空港跡地開発事業に伴う調査をはじめとして、大規模開発が数多くなされており、それらの事業に伴う調査例が数多く蓄積されている。また、弘福寺領讀岐国山田郡田団の調査（藤井ほか1992・山本ほか1999）に伴い、地形の変遷や古代の土地利用の詳細など、多岐にわたる調査・分析の対象となつており、高松平野でも調査の進展している地域であるといえる。しかし細かく見ると、本調査地の周囲250mではこれまで発掘を伴う調査例がなく、調査の部分的な空閑地であった。本書に紹介する林宗高遺跡の調査内容は、こうした調査の隙間を埋めるという意味でも重要である。

Fig. 1に周辺の遺跡分布図を掲載したが、その中でも発掘調査の成果が報告書として刊行されているものについて以下に列記している。各調査の詳細はそれぞれの発掘調査報告書を参照していただきたい。なお、遺跡名の頭につく数字はFig. 1中の遺跡番号に対応する。

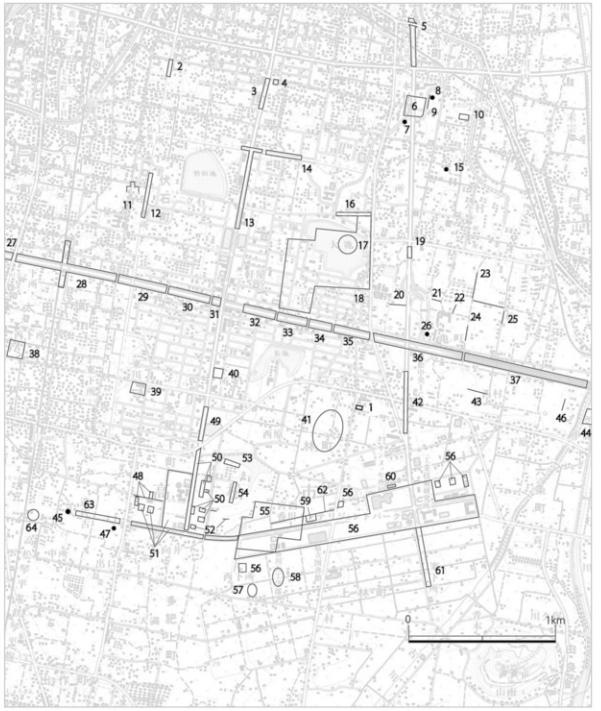


Fig. 1 林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図(縮尺 = 1/25,000)

1. 本書
2. 山元敏裕 1993 「伏石・鹿原遺跡」 高松市内埋蔵文化財試掘調査概報(平成3年度、4年度) 高松市教育委員会
3. 川畠聰編 2002 「天満宮西遺跡～集落・水田編～」 高松市教育委員会
4. 川畠聰・小川賢編 2004 「天満・宮西遺跡～旧河道編上西原遺跡～第2次調査～」 高松市教育委員会
- 4・10・11・38・44. 香川県教育委員会 2003 「香川県中世城跡詳細分佈調査報告書」
5. 大鷲和則・中西克也編 2001 「木太本村遺跡」 高松市教育委員会
- 木下晴一編 2009 「木太本村遺跡京町二丁目遺跡」 香川県教育委員会
6. 大鷲和則編 2001 「神内城跡」 高松市内遺跡発掘調査概報(平成12年度) 高松市教育委員会
- 川畠聰編 2005 「木太町神内城跡～第2次調査～」 ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書出光興産株式会社 高松市教育委員会
- 木下晴一編 1998 「木太本村II遺跡」 香川県教育委員会
8. 中西克也編 2007 「白山神社古墳」 高松市教育委員会
12. 山本英之・中西克也編 1999 「キモンド一遺跡」 高松市教育委員会
13. 川畠聰編 2001 「松浦下所遺跡」 高松市教育委員会
14. 山本英之・中西克也編 1998 「境日・下西原遺跡」 高松市教育委員会
16. 川畠聰・末光甲正編 2000 「上西原遺跡附汲仏遺跡」 高松市教育委員会
- 20・26,43・46. 小川賢編 2004 「津内・東井坪遺跡・中森遺跡・林浴遺跡・林下所遺跡・林下所・木太今村上所遺跡・林下所・六条乾遺跡・六条上川西遺跡・六条西村遺跡」 高松市教育委員会
27. 大久保徹也・森格也編 1995 「上天神遺跡」 香川県教育委員会ほか
28. 北山健一郎編 1995 「太田下・須川遺跡」 香川県教育委員会ほか
- 小川賢・高上拓はか編 2009 「太田下・須川遺跡」 高松市教育委員会
29. 山元敏裕はか編 1995 「蛙股遺跡」 高松市教育委員会ほか
30. 藤井雄三・山元敏裕編 1995 「居石遺跡」 高松市教育委員会ほか
31. 山本英之・山元敏裕・中西克也編 1995 「井手東II遺跡」 高松市教育委員会ほか
32. 山元敏裕はか編 1995 「浴・長池II遺跡」 高松市教育委員会ほか
33. 山元敏裕はか編 1994 「浴・長池II遺跡」 高松市教育委員会ほか
34. 山本英之・山元敏裕編 1993 「浴・長池II遺跡」 高松市教育委員会ほか
35. 山元敏裕はか編 1994 「浴・松木遺跡」 高松市教育委員会ほか
36. 宮崎哲治編 1993 「林・坊城遺跡」 香川県教育委員会
- 信里芳紀・山元素子編 2004 「中森遺跡・坊城遺跡II 東山崎・水田遺跡II」 香川県教育委員会ほか
37. 北山健一郎編 1995 「六条・上所遺跡」 香川県教育委員会ほか
38. 川畠聰 2009 「太田城跡」「香川県文化財年報」 平成19年度 香川県教育委員会
39. 川畠聰・末光甲正編 2000 「上西原遺跡附汲仏遺跡」 高松市教育委員会
42. 小川賢・山元敏裕編 2004 「宮高坊城遺跡」 高松市教育委員会
48. 大鷲和則編 1996 「松林遺跡」 高松市教育委員会
- 大鷲和則編 2004 「松林遺跡(第2次調査)」 高松市教育委員会・株式会社ユーリックホーム
49. 川畠聰編 2001 「凹原遺跡」 高松市教育委員会
50. 山本英之・中西克也編 1997 「日暮・松林遺跡」 高松市教育委員会
- 大鷲和則編 2003 「日暮・松林遺跡(済生会)」 高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財團済生会支部香川県済生会
- 川畠聰・小川賢・片桐千子編 『日暮・松林遺跡』 フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市教育委員会・株式会社企画企画
- 大鷲和則編 2005 「日暮・松林遺跡(済生会特養ホーム)」 高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財團済生会支部香川県済生会
- 渡邊誠編 2007 「日暮・松林遺跡(共同住宅)」 株式会社穴吹工務店・高松市教育委員会
51. 山下平重編 1999 「多肥松林遺跡」 香川県教育委員会
- 大鷲和則編 2006 「多肥松林遺跡(電気店)」 高松市教育委員会・株式会社ピッコ・エヌ
52. 川畠聰・小川賢編 2004 「多肥宮尻遺跡」 高松市教育委員会・株式会社西日本住建
- 大鷲和則編 2006 「多肥宮尻遺跡(品川販売店舗)」 高松市教育委員会・株式会社しまむら
55. 藤井雄三・山元敏裕・中西克也編 1992 「讃岐国弘法寺領の調査」

弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書高松市教育委員会
山本英之はか編 1999 「讃岐国弘福寺の調査II」
第2次弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書高松市教育委員会
56. 廣瀬常雄・西岡達哉編 1996 「空港跡地遺跡I」
香川県教育委員会ほか
藏本晋司・白石純・本田光子編 1997 「空港跡地遺跡II」
香川県教育委員会ほか
森下友子・白石純編 1997 「空港跡地遺跡III」
香川県教育委員会ほか
片桐孝編 1997 「空港跡地遺跡IV」
香川県教育委員会ほか
佐藤竜馬編 2000 「空港跡地遺跡V」
香川県教育委員会
木下晴一・三辻利一編 2002 「空港跡地遺跡VI」
香川県教育委員会ほか

第3節 調査日誌

4月 13日 調査区仮開いフェンス搬入・設置開始
4月 14日 仮開いフェンス設置完了。重機掘削開始
4月 16日 調査区東半にて第1遺構面を検出
4月 27日 第1遺構面の記録作業を完了し、下位の遺構面を目指し掘削を開始。
4月 28日 自然河川から多量の弥生土器を検出する。
5月 19日 土器検出完了。
5月 25日 出土範囲及び出土状況の記録をとり、取上げを開始。
5月 27日 林小学校保護者を対象に現場説明会を開催。38名の参加を得た。
6月 1日 遺物取上げ完了。記録作業を行う。
6月 3日 自然河川の堆積状況を確認するため、東西方向に断割りを行った。
6月 4日 調査区東半から埋め戻しを開始。渡り廊下建設予定地の確認調査開始。
6月 6日 渡り廊下建設予定地の調査完了。埋め戻し終了。

第4節 整理作業の体制と日程

整理作業は6月1日から開始し、2月29日に終了した。進捗状況は下表のとおりである。

Tab. 1 整理作業工程表

	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄	■■■■■										
接合・復元	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
遺物実測		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
遺構図レイアウト											
遺構図トレス		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
遺物レイアウト			■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
遺物トレス				■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
観察表作成					■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■			
遺物写真撮影						■■■■■	■■■■■	■■■■■			
写真レイアウト							■■■■■	■■■■■			
自然科学的分析(委託)								■■■■■	■■■■■		
原稿執筆									■■■■■	■■■■■	
編集										■■■■■	

第5節 林小学校生徒による発掘調査体験・現場見学

発掘調査地が小学校の校庭ということもあり、調査開始時より生徒および学校職員から発掘調査に対して高い関心を得ていた。また本市教委としても埋蔵文化財の調査成果を地域に還元することは望ましいことであるため、学校側と協議を行い、生徒を対象とした発掘調査体験ならびに遺跡見学を実施した。

日程 5月 8日 6年生による発掘調査体験 5月 15日 2年生による現場見学
5月 14日 3年生による発掘調査体験 5月 19・20日 5年生による現場見学

内容 6年生による発掘体験は、クラスごとに2回に分けて実施した。内容は、遺物の集中する自然河川中の土器溜りにおける土器の検出である。この際、誤って遺物を破損することの無いよう、使用する道具は竹べらと移植用スコップに限定した。また、作業に当たっては文化財課の専門員をはじめ、作業員を各所に配し、随時指導を行った。一方3年生による発掘調査体験では、対象者の年齢を考慮した上で、堆土中に混入した遺物の取り上げを中心に作業を実施した。使用した道具および指導体制は6年生の時と同様である。

小結 発掘調査体験は、それぞれ1回45分という短い時間であったが、児童達の積極的な参加を得ることができ、有意義なものになったと考えられる。ただし、発掘調査体験の後に、アンケートや作文等の課題を用意するなど、体験内容を整理し、さらに理解を深めるための過程を用意することができなかった。埋蔵文化財行政における教育普及活動の占める比重は、今後ますます増大するものと考えられる。より効果的な活用方法を提案することを目指したい。



PL. 1 遺跡説明の様子



PL. 2 発掘調査体験の様子

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の都県であり、面積約375km²の市域に約42万人の人々が暮らす、四国地方有数の都市である。平成の大合併により近隣の庵治町・牟礼町・塩江町・香川町・国分寺町と合併したこと、阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有することとなつた。これにより北は備讃瀬戸で岡山県と、南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。

本遺跡の立地する高松平野は、平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川、香東川、御坊川、詫田川、春日川、新川などの河川が流れるが、中でも香東川の堆積作用が最も強く、春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また、これらの河川はいずれも近世に大規模な改変を受けている。香東川は現在では石清尾山山塊の西側を流れているが、古絵図などには本来山塊の東側を流れていた事が記されている。また現在は埋没しているが、平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが指摘されている。林宗高遺跡の周辺でも、長池や大池などを結ぶ旧河道の存在が推定されており、本遺跡の発掘調査でも北西に向かう旧河道を検出している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代 高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は、久米池南遺跡、諫訪神社遺跡、雨山南遺跡、中間西井坪遺跡、香西南西打遣跡、西打遣跡などで確認されているが、本遺跡の位置する平野中央部付近ではいままだ検出例がない。旧石器時代後期にあたるウルム氷期には、備讃瀬戸が完全に凍結しており、多くの沼湖が存在し大小の河川が流れる盆地であつたことが指摘される（長谷川・齊藤 1989）。平野の大部分の堆積はこの後であり、現在この時期の遺跡が検出されるのは平野縁辺部の丘陵上に集中する。

縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。平野部での遺跡の増加が顯著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡、松林遺跡、川岡遺跡、浴・長池遺跡、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林・坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、平野部での集落の形成が顯著に認められる。本遺跡周辺でも、浴・長池遺跡、井手東II遺跡、上西原遺跡、東中筋遺跡、宗高坊城遺跡など、縄文晩期から継続する遺跡では、小規模区画水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。また天満・宮西遺跡、汲汲遺跡では1重～2重の環濠が巡る環濠集落が形成されたことが確認されている。この後、前前期～中期前半に継続する集落は少ない。浴・長池遺跡で前期から中期前葉まで連續した居住が認められるのを除けば、新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており、こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。上天神遺跡、松林遺跡、松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる。中期後半～後期前半にかけては、太田下・須川遺跡、上天神遺跡などで集落跡が確認される。後期後半には、岡原遺跡、空港跡地遺跡、日暮・松林遺跡、一角遺跡、天満・宮西遺跡、宗高坊城遺跡などで再度集落が形成され、一部はその後、終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ、長期間継続する集落が少ないとという特徴が指摘されている。

古墳時代 集落域に関する資料は多くないが、前述のように古墳時代前期前半までは弥生時代終末期から継続する遺跡が認められる。他には空港跡地遺跡、六条・上所遺跡、浴・松ノ木遺跡などで集落跡が確認される。集落域の状況が明らかでない一方、平野縁辺部の丘陵上には數

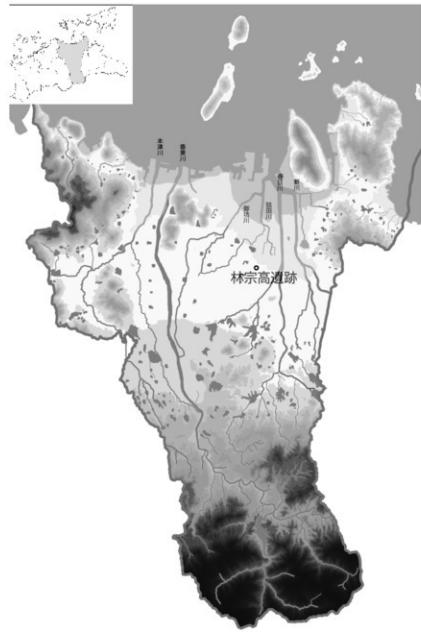


Fig. 2 高松平野の地形図と遺跡位置図

多くの古墳が築造される。高松平野中央部付近では、本遺跡の北西に前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群が存在するほか、平野の東部では高松市茶臼山古墳、南部では船岡山古墳などの有力な古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に、今岡古墳などを除いて中期古墳の例は極めて少ない。後期から終末期にかけては、丘陵上に数多くの群集墳が築造され、石清尾山山塊を中心に斎願寺山古墳群、南山浦古墳群などが調査されている。

古代 古代の高松平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、平野部のほぼ全面に南北線が東に約9～11°傾く条里地割が分布する。本遺跡周辺では特に弘福寺領讃岐国山田郡田園比定地における学際的な調査がなされ、当地の土地利用の変遷や条里制地割について重要な

な成果が得られた。この条里地割に沿った溝や建物跡が松繩・下所遺跡、空港跡地遺跡、汲引遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて、それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ、それに伴い集落の断絶と形成が認められる。また、発掘調査で全容の知られる例は無いが、周辺では拝師庵寺、多肥廃寺などが古代寺院として知られ、拝師庵寺では平成21年7月に発掘調査が行われた。平成21年度末に報告書が刊行予定である。

中・近世 中世高松の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏等が知られ、香西氏の平地の居館である佐野城、詰め城である勝賀城などが知られる。本遺跡周辺ではキモンドー遺跡で佐野城の堀が検出されている。居住域としては、空港跡地遺跡で古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され、当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。

天正16(1588)年、豊臣秀吉の家臣、生駒親正により高松城が築城され、城下町が整備される。その後、生駒騒動により生駒家が出羽国に転封されると、寛永19(1642)年、松平頼重が東讃岐12万石を拵し、高松城主として入封した。松平家は徳川将軍家の親藩として代々藩主をつとめ、明治維新を迎える。

(主要参考文献)

金田章裕 1993「讃岐国における条里プランの展開」

「古代日本の景観 方格プランの生態と認識」吉川弘文館

柴田博・糸魚川淳二 1989「瀬戸内海と古瀬戸内海」

『アーバンクボタ』No.28 株式会社クボタ

高橋学 1996「平地の微地形変化と開発」講座 文明と環境』6 歴史と気候 朝倉書店

長谷川修一・齊藤実 1989「高松平野の生いたちー第一瀬戸内黒島群以降を中心としてー」「アーバンクボタ』28 株式会社クボタ

山本英之・中西克也編 1992「讃岐国弘福寺領の調査」

「弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書」高松市教育委員会

渡邊誠 2007「地理的・歴史的環境」「日暮・松林遺跡」

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松市教育委員会

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査方法 調査対象地は高松市立林小学校の校庭に位置する、新校舎および渡り廊下建設予定地である。第1章で述べたとおり、本書では新校舎建設予定地と渡り廊下建設予定地南側の調査成果を報告する。発掘調査は重機による遺構面までの掘削と、人力による遺構の掘削を基本として行った。記録に際しては3点の基準点を設定し、基準点をもとに図化を行った。各基準点の座標はTab.2のとおりである。このうち、S3については調査区からやや離れた位置に設定した予備的な杭であったため、実際の図化と記録に当たってはS1とS2を基準としている。図面は平面図・断面図とともに縮尺1/20で作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを主に用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また、補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

Tab.2 基準点座標一覧表

	S1	S2	S3
X	144436.506	144432.358	144457.082
Y	52435.845	52463.536	52467.239

(数値は世界測地系第IV系による)

第2節 調査区の概要 調査地は南北長約13m、東西長約26mの長方形の北辺に、東西4m、南北約6mの長方形が接した形状を呈する。大きな長方形は新校舎建設予定地で、小さな長方形が渡り廊下建設予定地である(Fig.3)。以下では記述が煩雑になるのを避けるため、新校舎建設予定地を調査区、渡り廊下建設予定地南半を北拡張区と呼称することとする。

両者が接するのは調査区西端から東へ4～8mの範囲である。調査区南西隅は調査時の移動のために階段状に残しており、最終段階で掘削を行った。調査区中央やや南よりでは、東西方に向て試掘トレーンの痕跡が残る。

前節にて述べたとおり、調査に当たり3点の基準点を設定して記録を行った。以下、本報告で地点を呼称する際には、図中に示した座標方位とは若干ずれるが、S1～S2主軸を東西方向、それに直行する方向を南北方向とみなし、東西方向の位置関係はS1から北あるいは南に○m、南北方向についてはS1～S2主軸より東あるいは西に○mと表記する。

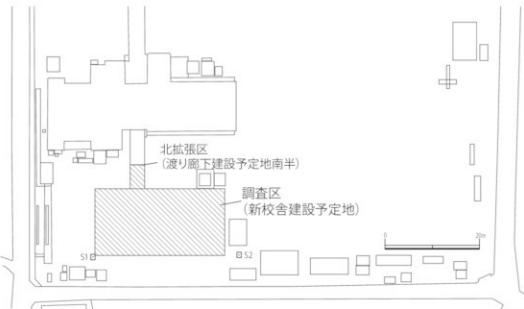


Fig.3 調査区配置図

第3節 基本層序

調査区は東西方向に長い平面形であるが、調査時の所見から東西方向で原地形が大きく変化することが明らかになった。このため、ここでは調査区の南壁・北壁の土層断面を中心に基本層序の記述を行うこととする。

近代以降の搅乱 調査地は小学校の校庭であり、当然現地表面はグラウンド造成時の花崗土である。花崗土を掘削すると、各所で近代以降の廃棄物を多量に含んだ搅乱層（Fig. 5 - B 層）が見つかった。搅乱層中にはコンクリートブロックや瓦など建造物関係の廃棄物のほか、炭片や鐵石などを多量に含んでいた。調査地付近にはかつて小学校に隣接して幼稚園が建設されていたという地元の方の証言から、その当時のごみ廃棄穴および解体時の廃棄跡であると考えられる。この近代以降の搅乱は特に調査区の東側を中心と顕著に認められ、広範囲で造構面を削平している状況が確認できた。平面的に見ると、S 1 から東へ 16m の地点よりも東側では、造構面である Fig. 5 - F・H 層がほとんど削平されている。

南壁の断面図では大きな削平は認めら

れないが、調査時の所見として限りなく南壁に近い地点まで搅乱が平面的に及んでいたことを確認している。調査区北壁の B 層を清掃中に、中世に属する土器片を数点検出した（Fig. 4 - 1・2）。1 は土師器土釜の口縁部である。2 は土師器足釜の脚部である。搅乱によって削平された調査区東側に中世の造構が存在した可能性が高い。また、所属時期は不明であるが、同じ搅乱層より石臼が出土している（Fig. 4 - S 1）。

第1造構面 調査区西側で現地表面下約 1.2m の深度で検出した造構面である（Fig. 5 - F 層）。主に灰色シルト～極細砂で構成され、古代の造構面となっている。調査区西側は弥生時代の自然河川 SR 1 下層が埋没してきた低地になっており、その低地上にさらに堆積作用が働き、形成された平坦面が第1造構面である。第1造構面の検出範囲が自然河川の流域に重複する様相が認められるため、第1造構面の堆積にも自然河川 SR 1 の堆積作用が大きく影響を与えた可能性が考えられる。従って、第1造構面は造構面であると同時に SR 1 上層として把握し、報告を行っている。なお、調査区中央の微高地よりも東側にはこの層は認められない。

SR 1 下層埋土 調査区西側で第1造構面の下層で検出した、多量の弥生土器片を含む黒色粘土層である（Fig. 5 - G 層）。土器の検出状況は写真図版に掲載している（PL 7・8）。

第2造構面 調査地中央で黄褐色シルトを中心とした層（Fig. 5 - H 層）が、西側へ下降し堆積する状況を確認した。後述する自然河川の基盤層であり、第2造構面とした。主に土色の違いから H 1 層と H 2 層に分層でき、H 1 层が上層にある。

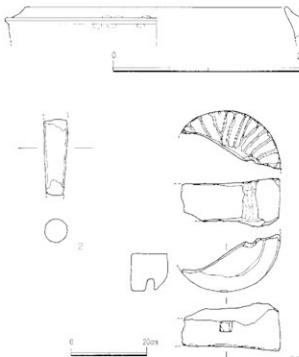
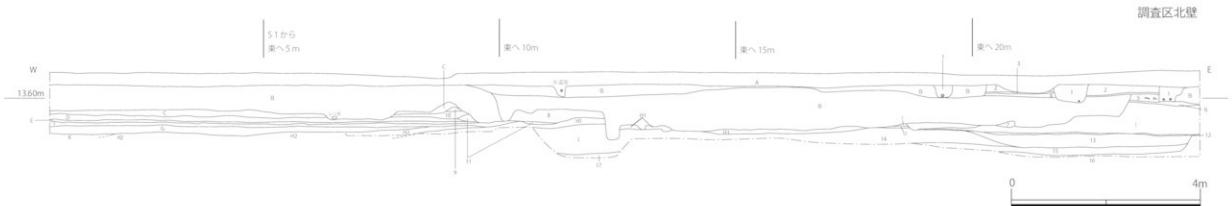


Fig. 4 搅乱層出土遺物（縮尺＝土器 1/4, 石器 1/10）



調査区北壁土層注記

近代凹陥の探査

1. 黄褐色細砂～粗砂に砂礫を斑在。水道管敷設時の埋瓦。
2. 2.5m/4 ブラウン色細砂～中砂
3. 2.5m/3 黄褐色細砂～細砂
4. 2.5m/3.3 に於て黄褐色細砂～細砂

B. 深部土層

5. 深部土層 コンクリート片・焼瓦片・瓦片・繊など多量に含む

造成物の基盤

6. 10m/4.4 白色細砂中に径1~3cmの円礫を80%含む。
7. 10m/4.5 黄褐色細砂層に径3cmの円礫を5%、近傍地盤含む。

土手・堤防の構成層

8. 10m/4.6 黄褐色土層に2.5m/6.0 明黄褐色土を斑在。50%含む。
9. 2.5m/1.5 黄褐色土層に径5.5cm円礫の内礫を20%含む。

自然河川埋土の埋置

10. 10m/4.7 黄褐色細砂～細砂中に径1~2cmの円礫を80%含む。

11. 10m/4.8 に於て黄色細砂中に径1~3cmの円礫を80%含む。

本末川上り側より運搬する方塊状の石子を斑在する。

12. 10m/4.9 黄褐色土層に径2cmの円礫を80%含む。

13. 10m/5.0 黄褐色細砂層に径5cmの円礫の内礫を10%含む。

田舎場

14. 2.5m/1.5 塗膜オーブン色粘土にFe少量化着。

15. 2.5m/2.5 黄褐色シルト～細砂に明黄褐色土を斑在。50%含む。

16. 2.5m/3.0 黄褐色シルト～細砂に明黄褐色土を斑在。50%含む。

第1 湿潤带

1. 黄褐色シルト～細砂

2. 2.5m/1.5 塗膜オーブン色粘土にFe少量化着。

3. 2.5m/2.5 黄褐色シルト～細砂中にFeを斑在。30%含む。

自然河川埋土の埋置

4. 2.5m/3.0 黑褐色粘土に多量の共生土器を含む。

調査区南壁土層注記

上面の耕土土

1. 2.5m/2.5 黄褐色細砂～中砂

2. 2.5m/3.0 黄褐色シルト～細砂

3. 2.5m/3.5 黄褐色シルト～細砂

4. 2.5m/4.0 黄褐色シルト～細砂に層厚25cmの層を25%含む。

5. 2.5m/4.5 黄褐色シルト～細砂

6. 2.5m/5.0 黄褐色シルト～細砂

半干状湿润帶の構成土

7. 2.5m/5.2 黄褐色細砂～中砂に層厚1cmの層を10%含む。

8. 2.5m/5.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

9. 2.5m/6.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

10. 2.5m/6.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

11. 2.5m/7.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

12. 2.5m/7.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

13. 2.5m/8.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

14. 2.5m/8.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

15. 2.5m/9.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

16. 2.5m/9.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。
17. 2.5m/10.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。
18. 2.5m/10.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。
19. 2.5m/11.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。
20. 2.5m/11.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

21. 2.5m/12.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

22. 2.5m/12.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

23. 2.5m/13.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

24. 2.5m/13.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

25. 2.5m/14.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

26. 2.5m/14.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

27. 2.5m/15.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

28. 2.5m/15.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

29. 2.5m/16.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

30. 2.5m/16.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

31. 2.5m/17.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

32. 2.5m/17.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

33. 2.5m/18.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

34. 2.5m/18.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

35. 2.5m/19.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

36. 2.5m/19.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

37. 2.5m/20.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

38. 2.5m/20.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

39. 2.5m/21.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

40. 2.5m/21.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

41. 2.5m/22.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

42. 2.5m/22.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

43. 2.5m/23.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

44. 2.5m/23.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

45. 2.5m/24.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

46. 2.5m/24.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

47. 2.5m/25.0 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

48. 2.5m/25.5 黄褐色シルト～細砂にFeを斑在。50%含む。

調査区南壁

Fig. 5 調査区南壁・北壁断面図 (縮尺=1/80)

11 · 12

なお、S 1 から東へ 16 m、北へ 1 m の地点付近で、H 1 層の最高所より、須恵器片とともに近世の陶磁器片が出土した (Fig. 6)。H 1 層は土質としては弥生時代の自然河川の基盤層 H 2 層と同質であり、調査当初は弥生時代の構造面であると認識していた。しかし、これらの遺物から、H 1 層の高所に位置する部分では、近世以降に堆積した箇所があることが判明した。ただし、高所に位置する部分は大規模な擾乱を受けており、こうした状況が確認できる範囲は極めて狭小であるため、ここで紹介するに留める。3 は須恵器杯・椀の底部である。底面はヘラケズリで切り離され、貼付けの輪高台を接着する。4 は信楽焼の鬱型。5 は唐津焼の碗である。

そのほか、魔土中または工事立会時に検出した出土層位不明の遺物をここで報告する (Fig. 7)。6 は弥生器二重口縁壺である。全体的に著しく磨耗しており、特に口縁部は本来もっと厚かったものと考えられる。7 は弥生土器高杯である。8・9 は弥生土器瓶である。10 は須恵器杯蓋である。体部の屈曲が明晰で、器形が深い。11 は須恵器長脚高杯の脚部である。

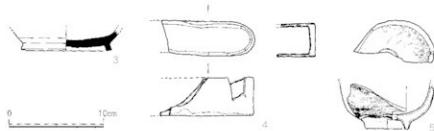


Fig. 6 Fig. 4 - H 1 層出土遺物 (縮尺 = 1 / 4)

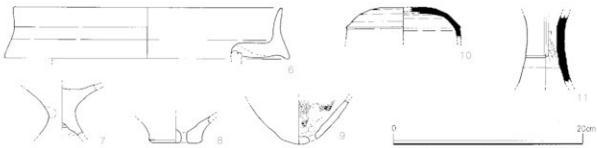


Fig. 7 出土層位不明遺物 (縮尺 = 1 / 4)

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 弥生時代

弥生時代に属する遺構は、調査区西側で検出した自然河川 SR 1 のみである。詳細は第VI章にて後述するが、SR 1 は出土遺物から弥生時代後期窯に一度埋没し、そのち古代にかけてさらに堆積作用が進み、平坦地を形成することが明らかとなった。本節ではこのうち、弥生時代の埋没による堆積層を SR 1 下層と呼称し、記述するものである。

S R 1下層(Fig. 8) 調査区西端から中央にかけて、北西方向に流れていた自然河川跡を検出した。表面検出時にはクラックが多く認められたため、遺物を包含するFig. 5 - G 層が堆積したのち、一度地表に露出し、乾燥した時期があったものと考えられる。河川埋土の東端は調査区西端から東へ約 11 ~ 12 m の地点で検出した。西端は調査区外へ続いた、川幅などは不明である。ただし、調査区南西隅で黄褐色系のシルト層の上がりを部分的に検出した。溝の西端にあたる可能性が考えられたため、断割り調査を行ったところ、一度緩やかに立ち上がるが、西側へ向けて再度下降する状況を確認した。起伏が緩いため、自然地形の起伏によるものと考えられるが、水位の低い時にはこの地点で川が一度分岐していた可能性も考えられる。いずれにせよ、川の西側は調査区外に広がることを確認した。

SR 1 の堆積状況と遺物の含有状況の確認のため、遺物の検出および取り上げ終了後に東西方向に長く断割り調査を行った。(Fig. 8)。断割り調査の結果、川底の標高は約 118.6 m を測ることが明らかにならなかった。また、SR 1 埋没土の最下層には遺物を含まないことを確認したため、断割り部分で堆積状況を確認したのみで全掘は行っていない。

S R 1下層出土遺物 (Fig. 9～20) Fig. 5～G 層および K 層上面から出土した遺物を報告する。自然河川の地理上に廃棄された遺物であるため、堆積時のローリング作用に伴う混入があつた可能性が高く、また連続して堆積作用の働く地形であるため、出土層位と出土遺物の時期とが敵対しない状況であるが、現場での遺物検出状況を元に報告する。

遺物の取り上げにあたって、調査区西側の広い範囲で多量の遺物が出土しており、調査後の整理作業を効率的に遂行するため、現地では便宜的に基準点SI-S 2を基準に25 m角のグリッドを設定し、遺物の取り上げを行った（Fig. 8）。ただし、出土状況に平面的な断絶や極端な集中は認められず、別途図示した範囲で満遍なく出土した状況（Fig. 8）である。従ってこの区画はあくまでも整理を見越した便宜的な区分である。土器の出土状況は、土器群が一連ものであると判断できる状況であったため、図版の作成に際しては取り上げのグリッドに関わり無く、器種ごとに並べている。各個体の出土グリッドは文末の遺物一覧表（Tab. 5）にまとめた。なお、遺物の総量としてはおよそコンテナボックス（504mm × 304mm × 168mm）100 箱近くの土器片が出土している。

土師器・須恵器 12は土師器土釜の口縁部である。13～17は須恵器杯身である。口縁端部が残存するのは13のみである。やや長めの口縁部が内側に直立し、底部が深い。口縁端部に段をもたらす、端面は丸く收める。口径は12.4cmを測る。15は口縁部の内窓具合が強い。13～16は体部外面のケズりが体部下半1／4程度の範囲におよび、17では1／2程度である。これらの型式学的特徴から、陶邑編年のTK10～TK43型式に相当するものと考えられる。18～19は須恵器杯・碗の底部である。底部切り離しはラブ切りによってなされ、18については貼り付け高窓の接合痕が觀察できる。20は須恵器壺・鉢の底部である。断面で粘土接合痕が觀察できる。21は須恵器壺の底部である。やや大型の壺で、丸みをもちに外に広がる。12～21についてには、混入の可能性が高い。

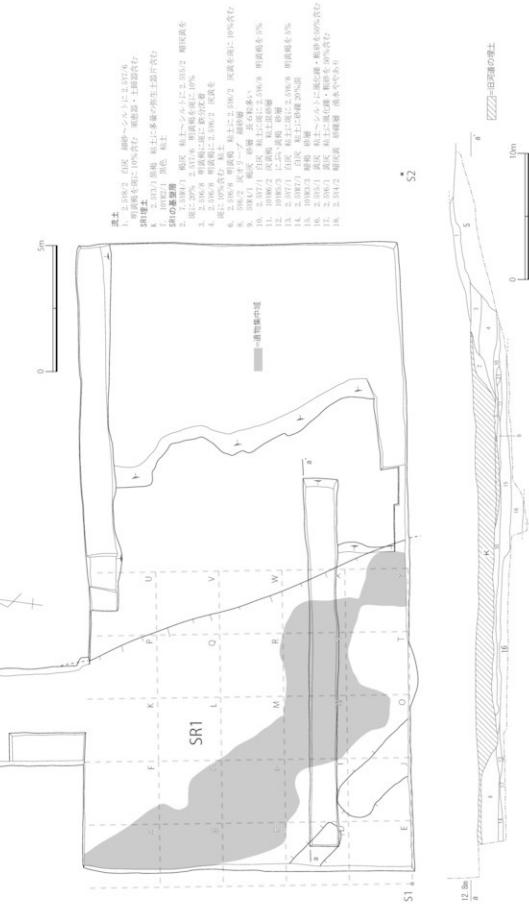


Fig. 8 SR 1 下層検出状況 (平面図 = 1/150, 断面図 = 1/300)

弥生土器 壺 (22 ~ 78) 22 ~ 67は壺の口縁部である。22 ~ 26は口縁部が強く外反する二重口縁壺であり、23・24・26には撫拂波状文がめぐる。焼成はいずれも不良で、胎土は灰白色を呈す、いわゆる白色系の土器である。32・33は口縁部が「く」の字状を呈するいわゆる複合口縁壺である。焼成は良好で、胎土中に角閃石細粒を稠密に含む。28は長頸壺である。頸部が外反しながら直立し、口縁部で屈曲して外へ広がる。頸部中央には、正面から見て左上がりの範描直線文がめぐる。34 ~ 67は広口壺の口縁部である。頸部が直線的に立ち上がるものと、やや外へ広がるもののが認められる。39はいわゆる白色系の土器である。器壁が厚く、口縁部の屈曲は明瞭ではなく、口縁端部が上下に肥厚する。頸部の外面にはヘラミガキが認められる。68 ~ 73は広口壺の頸部～体部である。70は粘土紐の接合を強固にするためのハケ調整が頸部の粘土接合面に認められる(PL19)。74 ~ 78は壺の体部である。体部最大径は概ね体部中央に位置する。内面のヘラケズリは体部中央までおよぶ。外面をヘラミガキで仕上げるもの(Fig11 ~ 75)と、細いタケハケで仕上げるもの(Fig11 ~ 77・78など)が認められる。

弥生土器 頸 (79 ~ 177) 79 ~ 100はいわゆる白色系の土器であり、総じて焼成不良で残存状況も悪い。口縁部の形状をみると、体部から直立気味に弱く屈曲するもの(Fig11 ~ 79・86など)と比較的薄く、「く」の字状を呈して強く外反するもの(Fig11 ~ 80・81など)がある。97は口縁端部を強く摘み出し、凹面を形成している。調整の判明しているものについて見ると、外面にタタキ調整が残るものが比較的多い。また、ハケ調整により仕上げるものも認められる。101 ~ 173は壺の口縁部である。器壁は全体的に薄く、口縁部と体部の屈曲は明瞭である。口縁端部は肥厚せず、四角く収める。口縁部と頸部の境に頸部上の直立部分を持つ個体(Fig12 ~ 113・116・126・130)が認められる。内面調整は上半に指頭圧痕が明瞭で、下半にはヘラケズリが及ぶ。174 ~ 176は壺体部である。174は壺体部の可能性も考えられる。176は体部最大径の位置に焼成後穿孔が1孔認められる。177は壺底部である。底径は6.2cmを測り、底部と体部の屈曲は明瞭である。外面にはタテヘラミガキが認められ、内面はヘラケズリが及ぶ。
弥生土器 底部 (178 ~ 299) 178 ~ 261・286 ~ 290・293 ~ 299はいわゆる白色系土器の底部である。総じて焼成不良であり、調整等が麻痺により不明な個体が多い。底部と体部の屈曲はおむね明瞭である。体部外面上にはタタキ調整が認められる個体が多く、底面にもタタキ調整の痕跡が残る個体が認められる。また、数量は少ないが底面にヘラミガキが認められる個体(Fig14 ~ 182)も存在する。191・210には底面に葉脈の圧痕が残っている(PL19)。185の底面には植物の種子の圧痕状の痕跡が認められる(PL19)。内面の調整が良好に残る個体は少ないが、板状工具の圧痕が残る個体がある(Fig13 ~ 160・Fig15 ~ 255)。262 ~ 285はいわゆる香東川下流域産の土器である。器壁が薄く、角閃石の細粒を含むが、肉眼観察による限り、角閃石の含有量は少ない。外面にはヘラミガキ、内面下半にはヘラケズリを施す個体が多数を占める。また、底面にもヘラミガキを施す資料が多く見受けられる(Fig16 ~ 270・273・279 ~ 282・292)。292は底部と体部の屈曲が明瞭ではなく、丸底に近い形状を呈するが、ヘラミガキの調整の方向によって明確に底部を区別している。286 ~ 290、293 ~ 299は瓶である。基本は底部中央付近に1孔だが、299は近接する位置に2孔を穿つ。

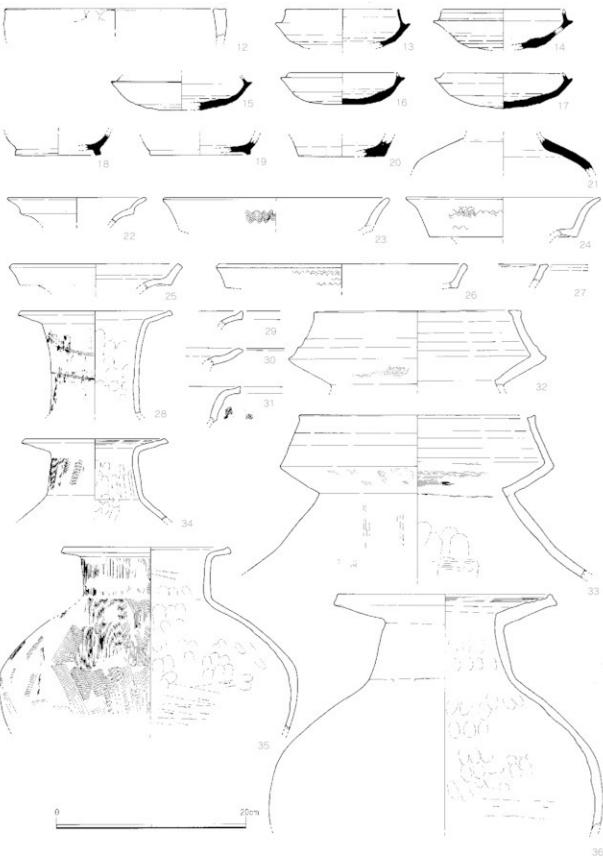


Fig. 9 SR 1 下層出土遺物① (縮尺 = 1/4)

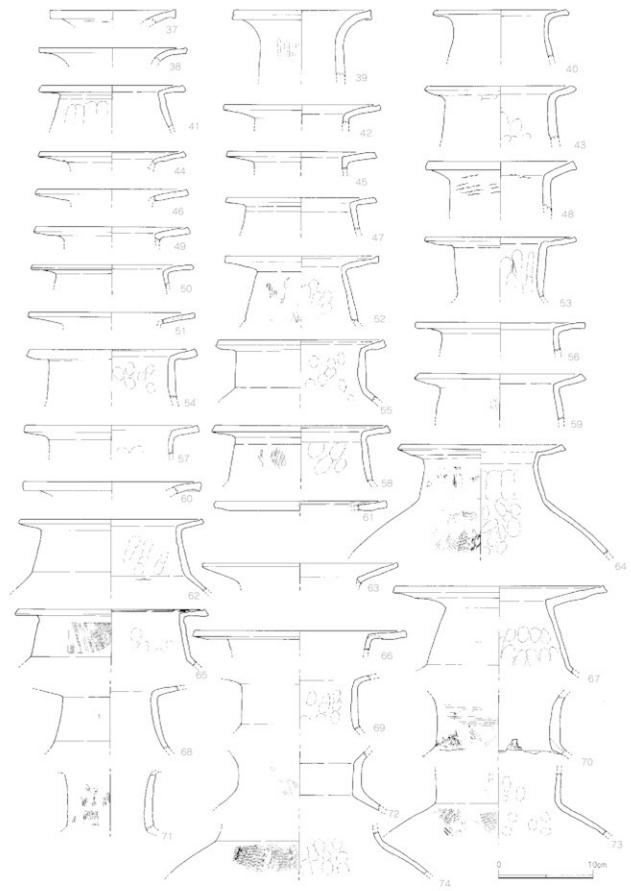


Fig. 10 SR 1 下層出土遺物② (縮尺 = 1 / 4)

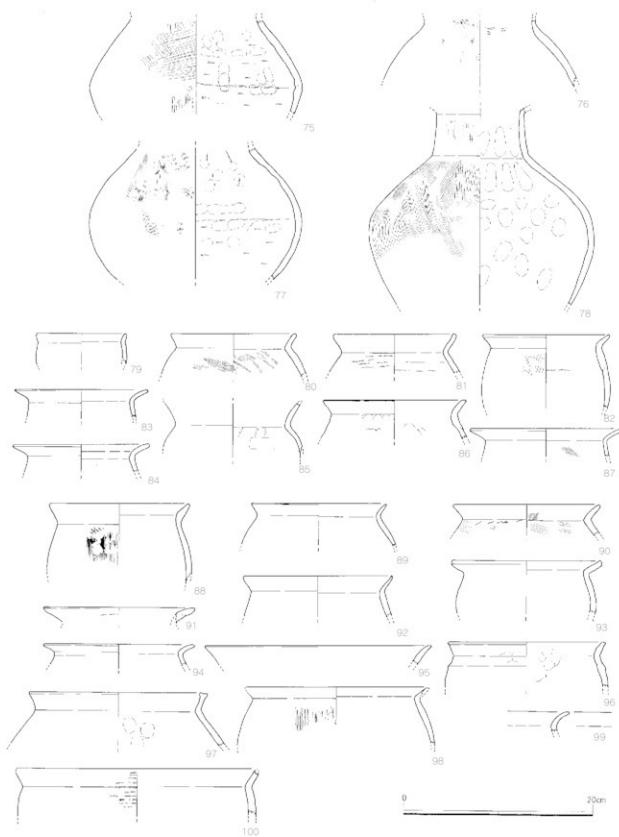
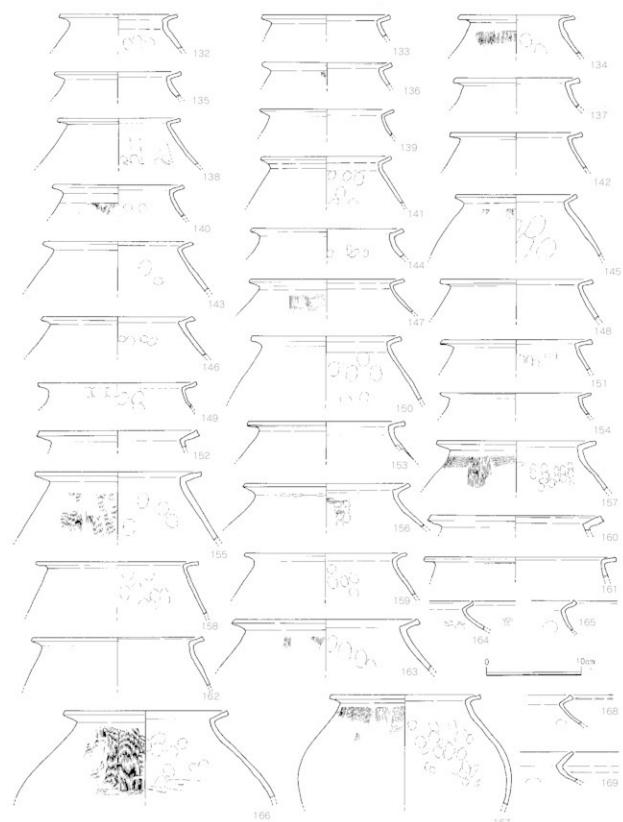
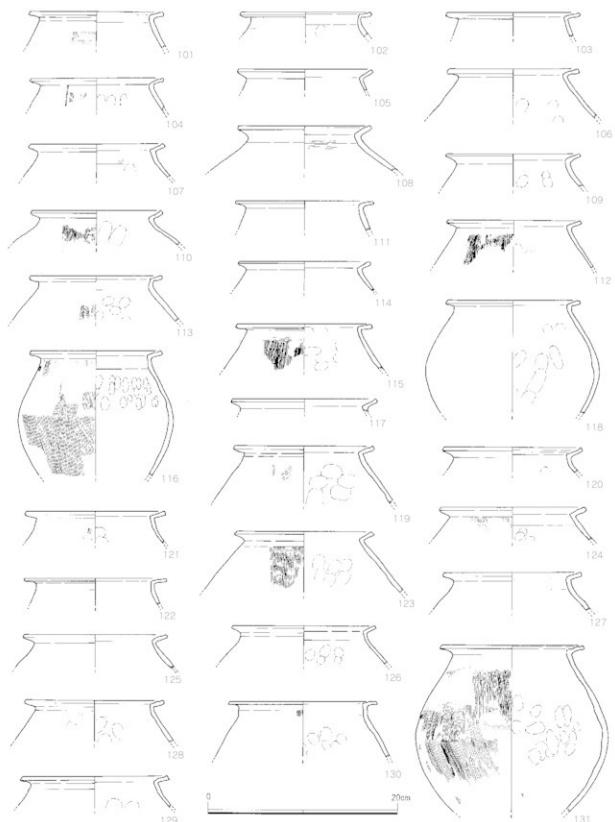


Fig. 11 SR 1 下層出土遺物③ (縮尺 = 1 / 4)



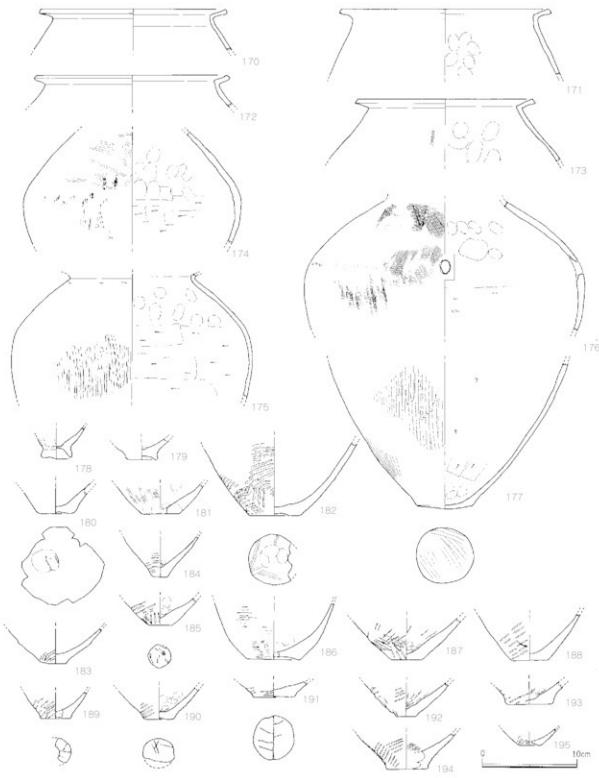


Fig. 14 SR 1 下層出土遺物⑥ (縮尺 = 1 / 4)

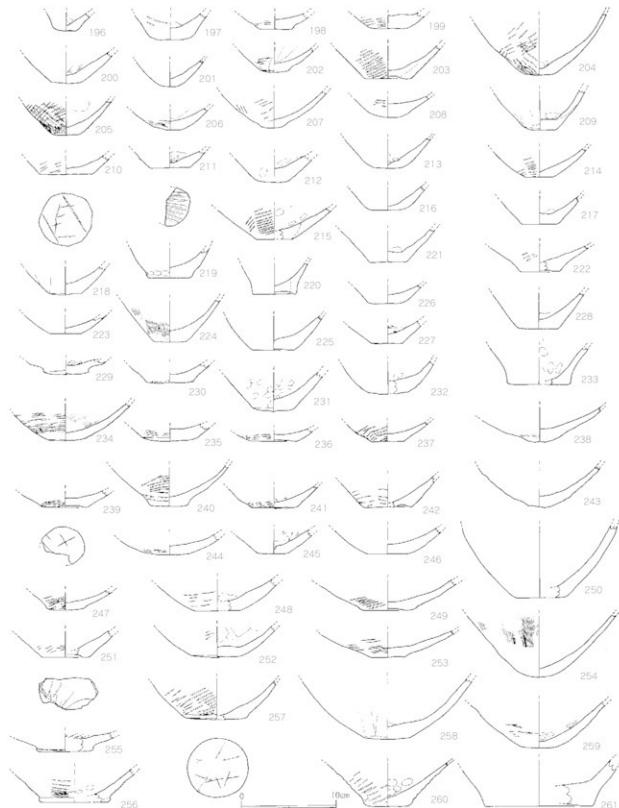


Fig.15 SR 1 下層出土遺物⑦ (縮尺 = 1 / 4)

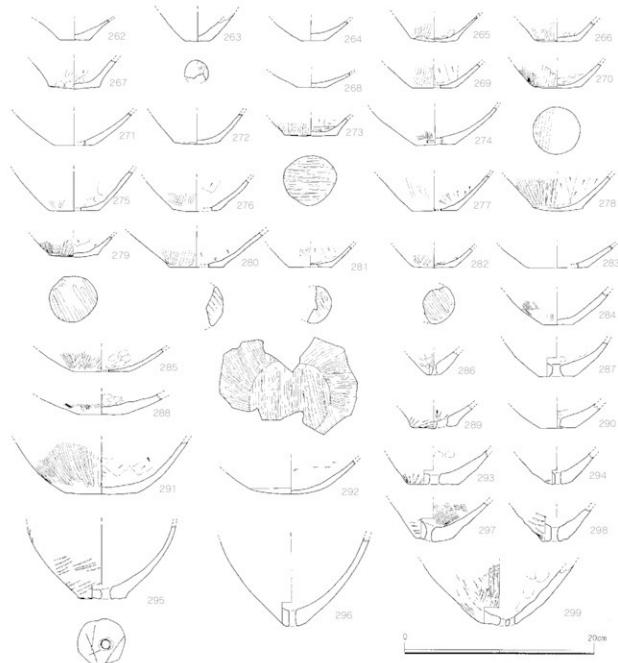


Fig.16 SR 1 下層出土遺物⑧ (縮尺=1/4)

弥生土器 高杯 (300~334) 315~318・321~325, 329 はいわゆる白色系土器である。総じて焼成不良で全体的に磨耗しており、調整等不明な資料が多い。300~312・314は口縁部の残存する資料である。300は小型の高杯である。脚部は「ハ」の字状に緩やかに屈曲して開き、端部は肥厚せずに収まる。また、上下2段の焼成前穿孔による円孔が認められる。やや強く湾曲しながら外に向かって開き、難部は肥厚せず丸く収める形状を呈す。310~314のように口径がcmを超える大型の資料も認められる。311~313は杯部内面に分割ヘタミガキが認められ、311については外面にも同様の調整が認められる。

313・319・320は杯部の残存する資料である。315~318, 321~334は脚部の資料である。杯部との接合部付近から「ハ」の字状に開くものと、器厚の厚い直立する筒状の脚部から強く

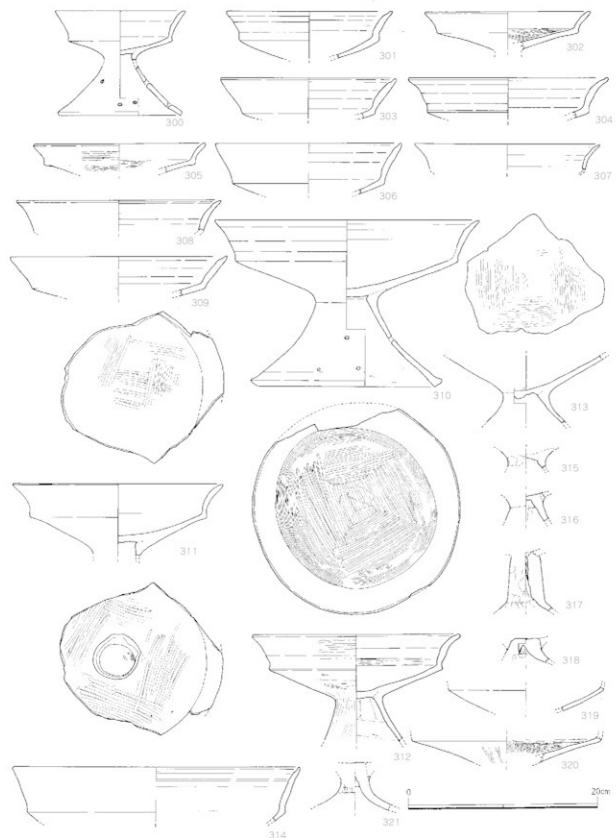


Fig.17 SR 1 下層出土遺物⑨ (縮尺=1/4)

屈曲して外へ広がるもののが認められる。315は接合部付近が粘土紐の単位で剥離したものと考えられる。321・324・327は円筒状の脚部の接合部側の一端を閉塞した形状を呈す。324の接合部を見ると、脚部に杯部を作り足すかたちで形成した可能性が考えられる。328は器種不明である。焼成不良で色調は灰白色～橙色を呈する。いわゆる白色系の土器である。断面三角形の突帯を貼り付け、突帯と体部の境付近に竹管文を巡らせる。また突帯の上方には3本の凹線をめぐらせている。装飾高杯の脚部片の可能性が考えられるが、突帯付近に傾斜の変換点が認められずないため、壺の体部片の可能性も考えられる。329は脚部中央に1孔1対4箇所の円孔が巡る。内外面ともにタテハケの痕跡が認められ、脚端部は丸く收める。331～324は脚端部がやや肥厚し、断面三角形に近い形状を呈する。内面はヘラケズリが施され、器壁が薄くなっている。

弥生土器 鉢 (335～336) 335は片口鉢の口縁部である。口縁部と体部の境は明瞭に屈曲し、口縁端部は丸く收める。336は小型の鉢である。口径10.4cmを測り、口縁部は直立気味に立ち上がる。337は器種不明である。器高が19cmと低い。底面付近は粘土接合痕で剥離している可能性が高く、本来は下へつながる器形であった可能性が考えられる。

弥生土器 蓋 (338・339) 338は蓋の頂部である。頂部は突起状に丸く收まり、端部は欠損している。339も蓋の頂部で、頂部の形状は突起状を呈す。白色系の土器であり、色調は灰白色を呈す。頂部内面は指圧印により押し窪められており、爪の圧痕が観察できる。体部内面は不定方向のハケによって調整されている。

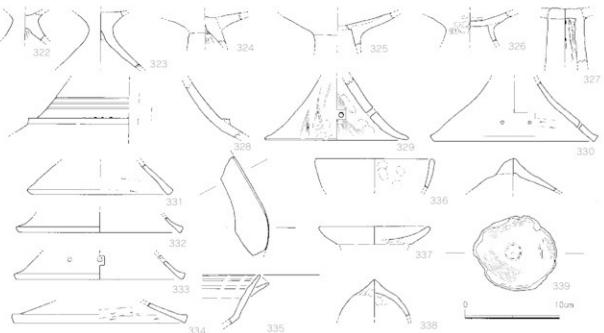


Fig.18 SR 1下層出土遺物⑩ (縮尺=1/4)

小結 SR 1下層から出土した多量の土器のうち、圧倒的に主体を占めるのは弥生土器である。弥生土器の器種組成を見ると、壺では広口壺・複合口縁壺・二重口縁壺がみられ、甕・高杯・鉢では小型～大型に法量分化していることがわかる。口縁部形状などの型式学的な特徴からは、これらの遺物群に時期差は小さいものと考えられる。自然化学分析の結果では、Fig. 5-G層は比較的短期間で堆積した可能性と、乾燥と湿潤を繰り返す状態であった可能性が指摘されて

いる。器形では広口壺の口縁部は肥厚しない点、底部では平底のものが丸底化しつつある点などが挙げられ、これらの特徴からこの土器群は下川津I式新相・II式(大久保1990)、V-4式～V-5様式(真鍋2000)におおむね比定できるであろう。

香東川下流域土器と白色系の土器の両者が認められるが、同器種でもそれぞれ器形が大きく異なることが明らかである。白色系土器は総じて摩滅が著しく、すべての器種で比較検討できないが、甕では口縁部形状、広口壺では口縁部の屈曲などに明瞭な差異が認められるほか、外面調整では白色系土器がタキを頼用するのに対し、香東川下流域土器ではミガキと細いハケを多用するといった製作技法上の違いも見て取れる。筆者の力量不足から、ここで考察することはできないが、堆積状況から、これらの資料が比較的一括性が高いことは先述のとおりである。高松平野における香東川下流域土器と白色系土器の並行関係を検討する素材となりうる資料であろう。

(主要参考文献)

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『下川津遺跡』

瀬戸大樹建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 香川県教育委員会ほか

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社

松永真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』第2号香川県歴史博物館

真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社

S R 1下層検出中出土土器 挖掘時の掘削の順序として、古代の構造面である第1構造面の調査完了後に下層の構造検出を目指して掘削を行った。試掘調査によって、第1構造面の下層に弥生土器を多量に含む自然河川があることが判明していたため、弥生土器検出面までは、重機を用いて掘り下げを行った。重機によることなく、重機掘削後の清掃時に出土した遺物は、帰属する層位を厳密に比定できないと判断したため、SR 1下層検出中出土土器としてここで報告する。

須恵器 (340～343) 340・341は須恵器杯身である。340の口縁部は内向せず直立し、受部は水平に広がる。口縁端部は丸く收める。341は体部下半1/4程度の範間にヘラケズリが及ぶ。342は須恵器杯口縁部である。直立する深い口縁部をもち、口径は17.0cmを測る。343は須恵器高杯の接合部である。脚部には長方形の透孔が3方向に配される。穿孔時の工具痕から、杯部と脚部の接合部に穿孔がなされたことが明らかである。

弥生土器 壺 (344・345) 344・345は広口壺の口縁部である。頂部から強く屈曲し、口縁部が水平方向に伸びる。

弥生土器 壺 (346～355) 346～354は壺の口縁部である。体部から口縁部にかけて「く」の字状に強く屈曲し、短い口縁部に続く。端部は肥厚せず、四角く收める。355はいわゆる白色系の土器である。外表面は口縁部付近までタタキの痕跡が残る。口縁部と体部の境の屈曲は弱く、弱く外反しながら広がり、端部は丸く收める。

弥生土器 底部 (356～370) 356・357は内面にケズリが丹念に施され、器壁が非常に薄い。358～369はいわゆる白色系の土器であり、器壁が厚い。358は外表面にタタキの痕跡が残り、底面には粗いハケの痕跡が残る。367・368は甕である。底面中央に焼成前に円孔が1孔穿たれている。370は角閃石を多量に含む弥生土器壺、甕の底部である。底部と体部の屈曲は不明瞭で、丸底に近い形状を呈すが、ヘラミガキの方向によって底部と体部が明瞭に分かれている。

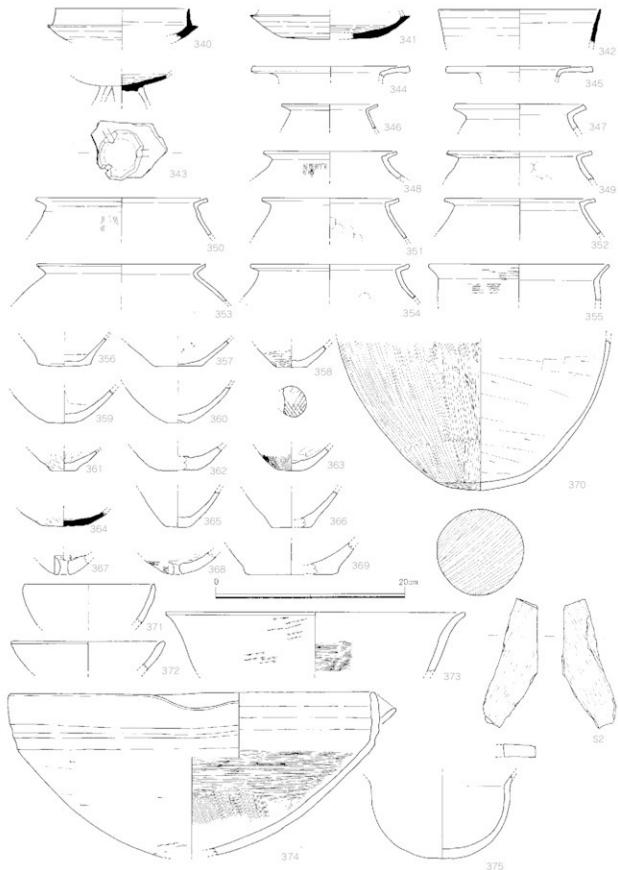


Fig.19 S R 1 下層検出中出土土器 (縮尺=土器1/4, 石器1/4)

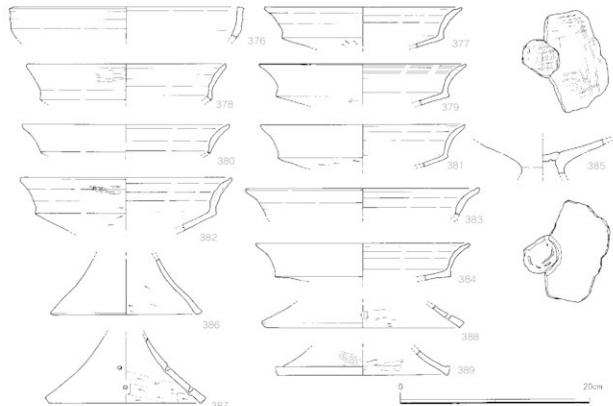


Fig.20 S R 1 下層検出中出土土器 (縮尺=1/4)

弥生土器 鉢 (371～376) 371・372は小型の鉢である。口縁部は緩やかに内反して丸く取まる。373・374は大型の鉢であり、373はいわゆる白色系の土器である。外面にはタテキの痕跡が残り、内面はヨコハケにより調整される。口縁部はゆるやかに外反し、丸く收める。374は片口鉢である。接合作業により、ほぼ完形に復元することができた。口縁部は基本的に直立し丸く收める。ユビオサエによって片口部が作り出される。体部から底部の外面はヘラケズリが施されている。底部付近にはヘラケズリ前のタテキ痕が一部残っている。内面下半はタテハケ、上半にはヨコハケが施される。375は白色系土器の小型鉢である。体部は球体に近いプロボーションで、口縁部にかけてやや屈曲する。

弥生土器 高杯 (377～389) 377～384は高杯の口縁部である。総じて口縁部が強く外反し、口縁端部は丸く收める。378・382は口縁部外面にヨコヘラミガキが認められる。385は杯部と脚部の接合部である。円盤充填の痕跡が良好に観察できる。杯部内面は分割ヘラミガキが施される。杯部底面にはヘラ状工具による線刻が円弧を描いて刻まれている。脚部を接合する際の目印の役割を果たしたものと考えられる。388～389は脚部である。387・388は脚部中央に円孔が穿たれる。387は孔が外面から穿たれるが、未貫通である。

石器 S 2は用途不明の板石である。表裏面ともに縦方向の擦痕が見られるため、砥石の可能性も考えられるが、砥面と判断するには表面があまり平滑でなく、断定できない。

第2節 古代

第1遺構面から古代に属する遺物がまとめて出土しており、遺構面の形成時期が古代以前であることが明らかである。この遺構面上で検出した遺構からはほとんど遺物が出土せず、厳密な時期比定は困難なものばかりであるが、埋土の類似性や同一遺構面からの堀り込みなどを重視して、ここまとめて報告することとする(Fig.21)。

調査区西側で遺構面となっているのは、暗褐色シルトを主体とした層である(Fig.5—F層)。この層は弥生時代後期後葉に埋没した自然河川S.R.1の上層であり、古代に再度洪水等により埋没して平坦地を形成したものと考えられる。自然河川の埋没後平坦地となった場所が生活域として利用されたことが判明した。この遺構面中からは多量の遺物が出土しており、遺構面の形成時期を検討する素材となりうるため、S.R.1上層(第1遺構面)出土遺物としてここで報告する(Fig.21~22)。

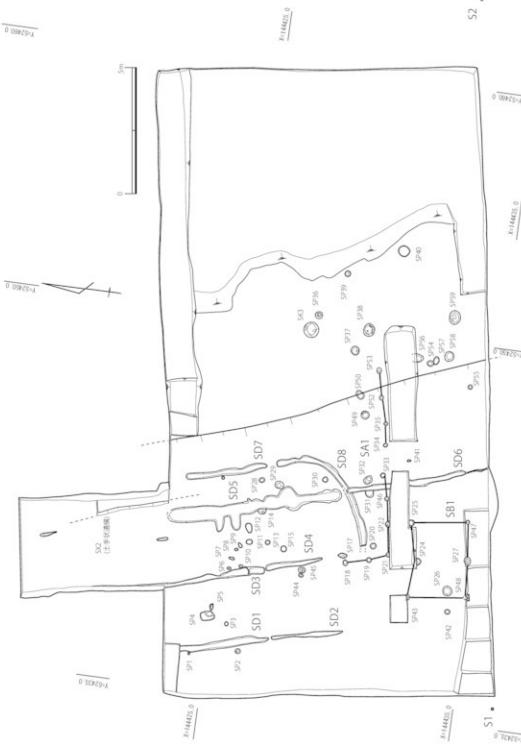
弥生土器(390~393) 390~392は甕の口縁部である。390・391は体部から強く「く」の字状に屈曲して短い口縁部に続く資料である。392はいわゆる白色系の土器である。直立気味の体部から外方へ緩やかに屈曲し、短い口縁部が再度直立する。393は高杯の接合部である。

土師器(394) 394は土師器碗の口縁部である。丸く肥厚する口縁部形状を呈す。

縁袖陶器(395) 縁袖陶器碗または皿の底部である(P.L15)。遺構等には伴わずに出土した。削出しの円盤状高台、内面~底面および高台側面まで袖裏が付着し、袖調は淡緑色を呈す。素地はやや軟質で、色調は灰白色を呈す。

須恵器(396~423・425) 396~399は蓋である。396は口縁部内側にかえりをもつ小型の蓋で、口径8.8cmを測る。400は杯身の口縁部である。短い口縁部が内傾せず直立気味に伸びる。401は皿の口縁部である。口径15.2cmを測る。402~404は杯口縁部である。405は杯・皿底部である。底部切り離しはヘラ切によりなされる。406~407は杯・高杯口縁部である。口縁部は内湾し、丸く收める。408~409は無高台の杯・皿底部である。底部切り離しはヘラ切である。410~415は輪高台の底部である。416~419は高杯の脚部である。420は壺の口縁部である。421は壺・甕底部である。422・423は大型の鉢口縁部である。ともに櫛描波状文を巡らせる。423は口縁部を外側に折り返して成形している。425は甕体部と器種不明個体が融着する個体である。内外面ともに自然袖が付着する。

その他(424~426・427・S1) 424は瓦質の培焼である。426は移動式窓片である。427は土鍾である。長さ5.9cm、最大幅2.3cmを測り、長方形に近いプロポーションである。S3は器種不明のサスカイト片である。片面は細かな調整が集中し、刃部を形成している可能性がある。



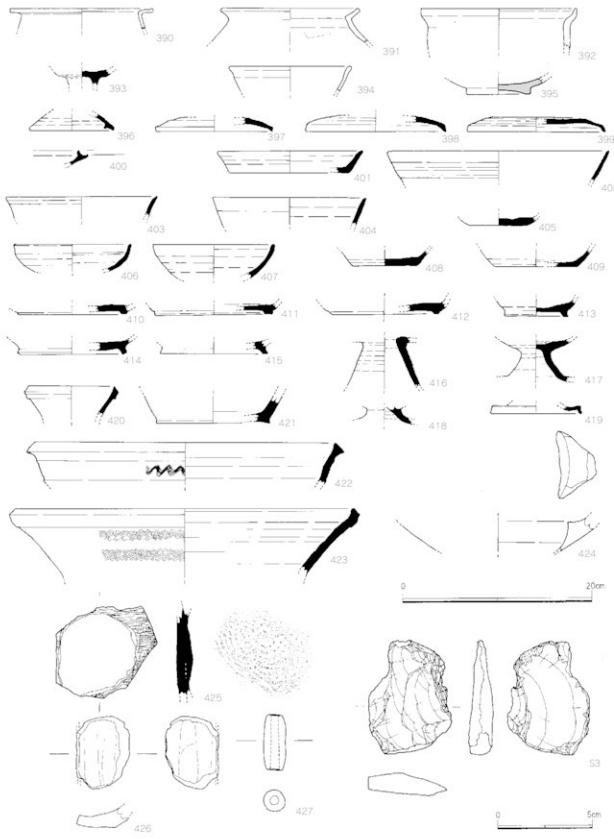


Fig.22 S R 1 上層 (第1造構面) 出土遺物 (縮尺 = 土器1 / 4, 石器1 / 2)

(1) 構列跡

S A 1 (Fig.23) 調査区西側から中央にかけて検出した構列跡である。近接する溝群と主軸方向を捕え、南北方向に2間、東西方向に7間を検出した。東側では北に向かって直交する柱列は検出できなかった。柱穴の埋土は灰オリーブ色シルト～極細砂ないし暗オリーブ灰色極細砂～細砂と類似し、遺構深度も0.2～0.3m程度で共通する。柱穴間の距離は0.8～1.25mで、平均すると1.03mである。調査時にはSP33とSP34が平面形で連続し、SP33とSP34を境に東西で別の遺構である可能性も考えていた。しかし、SP32～34間の距離が0.65mと他に比べて短く、またSP32の断面形が二段掘削で深さ0.5mと他の柱穴の形状と大きく異なるため、SP32～34が一連のものではなく、SP33とSP34が連続すると本報告では判断した。ただし、遺構埋土などは共通性が高く、一連のものであった可能性も否定はできない。

出土遺物については、固化していないが、S P 18から角閃石を稠密に含む弥生土器壺の肩部を検出した。S P 21からは土師質の土器細片を10点程度検出した。S P 22からは固化不能であるが土師器杯の口縁部の可能性がある資料が出土した。S P 46からは角閃石を稠密に含む土師質の土器片が出土した。S P 32からは軟質に焼成された須恵器体部片と弥生土器のタキ甕部部片が出土した。

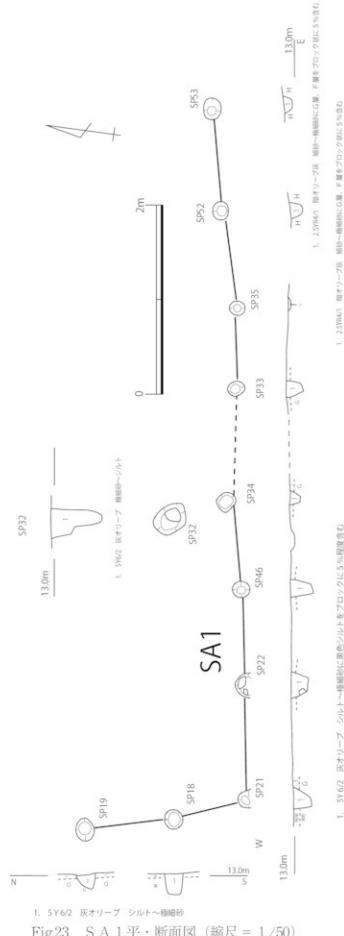


Fig.23 S A 1 平・断面図 (縮尺 = 1 / 500)

(2) 挖立柱建物跡

S B 1 (Fig24) 調査区南西隅で検出した掘立柱建物跡である。北西隅から順に反時計回りに S P 43・48・27・47・25・24から構成される。桁行は南北1間・東西2間である。北列の柱穴と南列の柱穴の間隔は約2.3mを測り、各列中の柱穴間の距離は平均して約1.5mである。北列のSP43・24・25は試掘トレンチによって北半が削平され、残存した南半でも上部はかなり掘り削られている状況であった。遺構埋土はすべて灰オリーブ色系統のシルト～極細砂である。

出土遺物であるが、SP27の埋土上面から須恵器壺の体部片(428)が出土したほか、S P 24・27から土師質の土器細片が出土した。

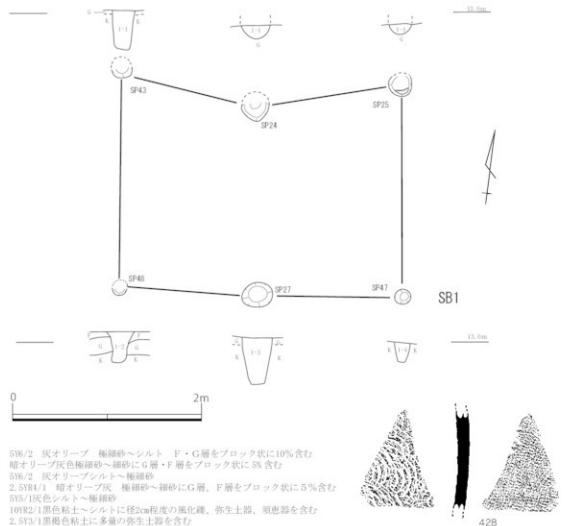


Fig24 SB 1 平・断面図 (縮尺=遺構 1/40, 土器 1/4)

(3) 溝 (Fig25・26)

調査区西側を中心に8本の溝を検出した。いずれも上面が削平されたのか、残存する深度は極めて浅い。遺構面まで重機掘削を行っているため、調査時に削平した部分があるかもしれないが、調査時の所見として遺構を認識してからの重機掘削は行っていないため、本来の遺存状況と大きさはかけ離れてはいるものと考えられる。SD 1～7は方向をそろえて平行しており、埋土もほぼ同一であることからほぼ同時期に機能したものと考えられる。溝の方向は座標方位に対しておよそ北15度西 (N 15°W) ずれている。溝幅が狭く、非常に深いという特徴があり、耕作にともなう堆積の可能性も考えられる。

S D 1 調査区の西北で検出した溝で、最大長約6.1m、最大幅約0.3mを測り調査区外へさらに伸びる。第1遺構面を基盤層とし、深度は約0.02mほどである。SD 2と連続する同一の溝であった可能性も考えられる。出土遺物としては須恵器の壺口縁部がある(429)。その他、須恵器片および土師質土器片を少数検出した。土師質土器は弥生土器片の可能性が高いが小片であり、詳細は不明である。溝の基盤層はその堆積時に下層の自然河川の遺物を比較的多く混入しているものとみられ、遺構出土遺物にも下層出土の弥生土器が混入しているものと考えられる。

S D 2 SD 1の南側に連続して検出した溝である。全長約28m、最大幅0.2m、深度0.04mを測り、遺構埋土は他の溝と同様にぶい黄褐色極細砂～細砂である。土師質の土器細片を含むが細片であり詳細は不明である。

S D 3 北括張区西端付近で検出した溝である。最大長6.8m、最大幅約0.3mを測り、調査区外に続く。南端付近で浅い段をもち深くなるが、最深部でも約0.02mを測るのみである。430は須恵器壺の口縁部である。口径は18.0cmを測る。その他須恵器壺の体部片と土師質土器の細片が出土した。図示していないが、須恵器壺は内面に青海波紋、外面上格子状叩きを明瞭に残す個体である。

S D 4 SD 3の南側に連続して掘削された溝である。SD 3と近接しており、本来はSD 3と一連の溝であった可能性も考えられる。全長は約2.3mを測り、埋土はにぶい黄褐色極細砂～細砂である。小片であり図化できなかったが、須恵器壺の口縁部と土師質の土器細片および石鐵(S 4)が出土した。石鐵は小型の無茎式であり、長さ19.0cmを測る。左右非対称であり、側縁の片側は欠損している可能性がある。

S D 5 SD 3の東、SD 7の西に位置する溝で、全長約6.9m、最大幅1.0m、深さ0.02mを測る。平面形で東西に張り出しが取り付くような形状を呈する箇所が3箇所程度認められるが、本来の溝の方はより直線的のものでいた可能性が高い。須恵器の壺体部片、椀もしくは杯の底部付近の破片ならびに土師質の土器細片が出土している。

S D 6 SD 5の南側に連続して掘られた溝である。本来SD 5と同じ溝であった可能性も考えられる。南端で急激に幅を細め、調査区外へ伸びる。中央は試掘トレンチによって南北に寸断されているが、平面形の連続性から一連の溝であると判断した。遺物は土師質の土器片が少量出土している。図化できなかったが、弥生土器高杯の可能性が高い破片を含む。ただし、遺構面の遺物出土状況から、この破片によって遺構の所属時期を決定するには困難である。

S D 7 SD 6の東側で検出した溝である。全長約3.2m、最大幅約0.3mを測る。SD 8と一連の溝であった可能性も考えられる。須恵器小片と土師質の土器片が出土している。

S D 8 SD 7の南側に位置し、西南方向に弧を描くように延びる溝である。他の溝群を検出し掘削した後の清掃で検出したため、SD 6との切りあい関係は不明である。また、西端は削平されており、さらには西へ続いた可能性が高い。埋土は灰黄褐色極細砂～シルトと他の溝と近

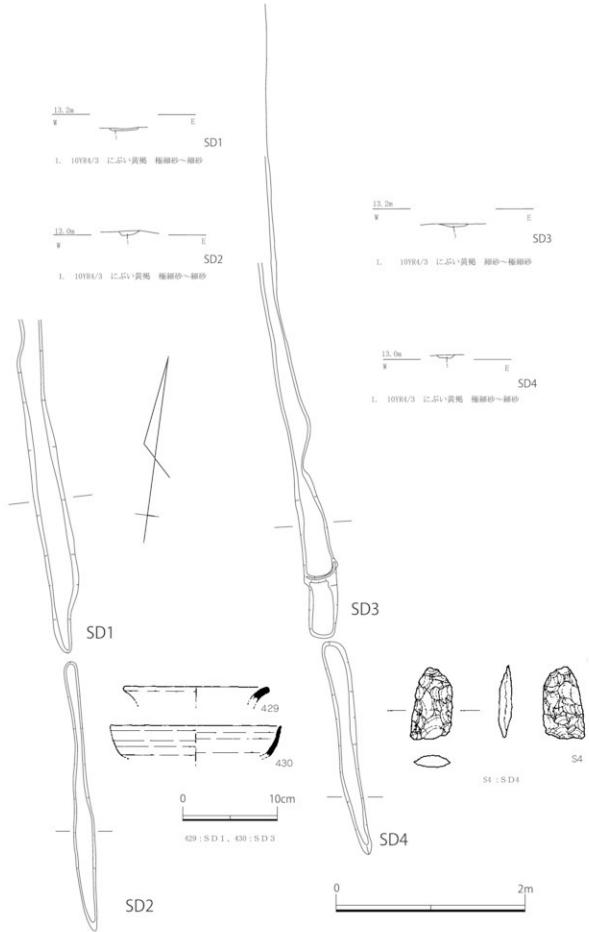


Fig. 25 SD1 ~ 4 平・断面図 (縮尺 = 遺構 = 1/40, 土器 = 1/4, 石器 = 1/10)

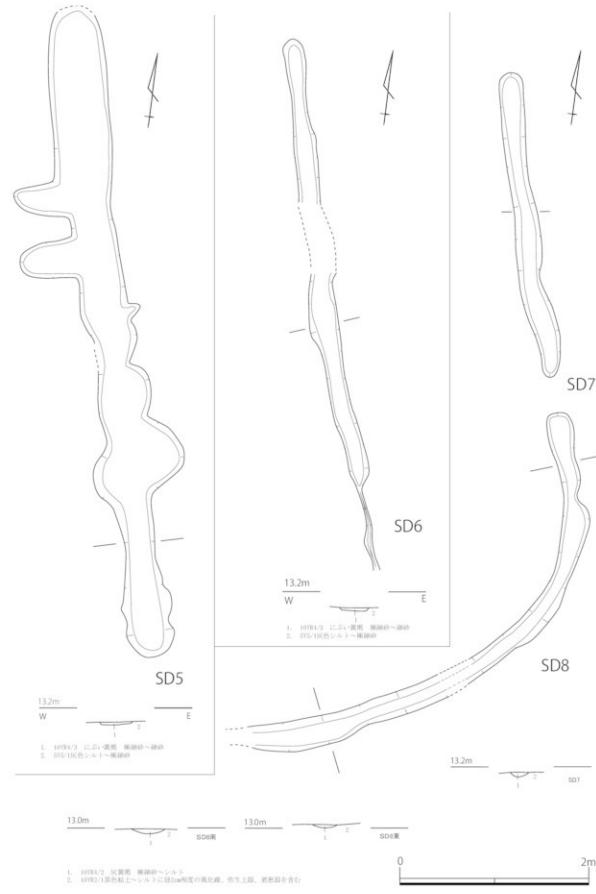


Fig. 26 SD5 ~ 8 平・断面図 (縮尺 = 遺構 1/40)

似しており、埋没に大きな時期差はないものと考えられる。須恵器杯の口縁部と土師質の土器細片が出土しているが詳細は不明である。

S D 9 S D 5 の南西側に位置する小規模な構である。全長 0.5 m を測るのみであるが、断面形および埋土が他の溝と共通している。土師質の土器細片が出土したが詳細は不明である。

(4) 土手状遺構

S X 2 (Fig.27)

調査区の南壁・北壁の精査中に検出した遺構である。調査区の掘削時にはその存在を認識することができず、削平してしまったため平面形は不明であるが、北抜張区の掘削に際しては平面的に検出し、溝群と同様、北西方向に約 10°傾いて伸びることを確認した。南壁と北壁に対応する堆積層が認められることから、調査区を継続するかたちで本来は土手状の遺構が存在したものと考えられる。壁面での検出地点を直線的に結ぶと、調査区西半で検出した溝群とほぼ平行する。また川の埋没土の東端付近に位置することから、防水上の機能を有した遺構である可能性が高いと考えられる。西側で検出した溝群が測溝であると仮定すると、畔壁であった可能性も考えられる。

堆積状況をみると、黄褐色・黒褐色・灰黄色などのシルトを主体とした土壤を交互に山状に積み上げていることがわかる。土器等は出土していないが、堆積状況から、第 1 遺構面の堆積層の上面に築かれたことが確実であるので、築造された時期が古代以降であることが明らかである。なお、南壁でこの土手状遺構を継に裁断するように土壤サンプルを採取し、花粉分析ならびにプラントオパール分析を実施した。結果は第 V 章を参照いただきたい。

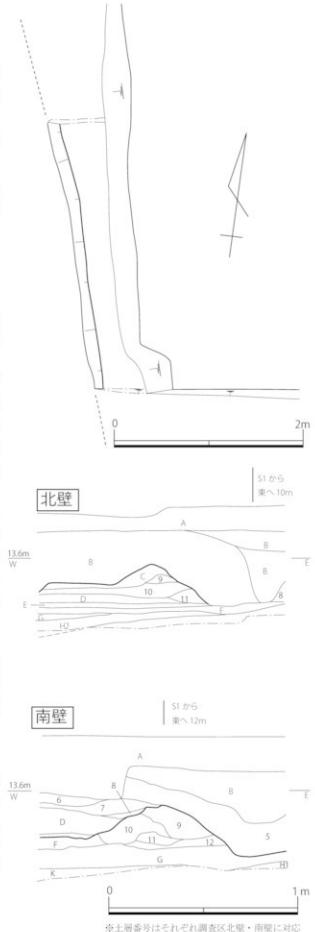


Fig. 27 土手状遺構平・断面図 (縮尺 = 1 / 40)

(4) 土坑及びピット (Fig.28)

上記の遺構以外にも土坑およびピットを複数検出しているが、中でも遺物の出土したものを取り上げて報告する。なお S A 1・S B 1 を構成するピットで遺物が出土したものについては、それぞれの遺構図に掲載している。その他の遺物出土遺構は Fig.29 にまとめた。

S P 3 調査区北西隅、S D 1 の東側で検出したピットである。431 は須恵器の杯口縁部である。小片であり口径は不明だが、器厚の薄い口縁部が直線的に外に向かって伸びる。

S P 4 調査区北西隅、S P 3 の北東で検出した。土師質の土器細片が出土したが詳細は不明である。

S P 5 調査区北西隅、S P 4 の東で検出した。土師質の土器小片が出土したが詳細は不明である。

S P 12 S D 5 の中央西側で検出した。土師質の土器片が数点出土したが詳細は不明である。

S P 17 調査区西側中央、S D 4 の南端付近で検出した。土師質の土器数点を検出した。うち数点はいわゆる白色系の土器であると考えられる。ただ、全て細片であり詳細は不明である。

S P 20 S A 1 の西辺東側で検出した。土師質の土器細片が 20 度程度出土したが、全て細片で磨耗しており詳細は不明である。

S P 37 S A 1 の東側で検出したピットである。432 は須恵器の壺口縁部であると考えられる。小片であり口径は不明である。口縁部が上下に肥厚し、直線的な端部形状を示す。

S P 38 調査区中央やや東よりで検出した。内面にハケ目の残る土師質の土器小片が出土したが詳細は不明である。

S P 42 調査区南西隅、S B 1 の西側で検出した。土師質の土器小片が出土した。磨耗しており図化不能であるが、杯の口縁部の可能性がある資料を含む。

S P 59 調査区中央南隅で検出した。土師質の土器片が出土したが、小片で磨耗が著しく詳細は不明である。

S K 3 調査区中央北側で SK 1 の南側、SK 2 の東側で検出した。須恵器と土師質の土器片が出土したが、詳細は不明である。

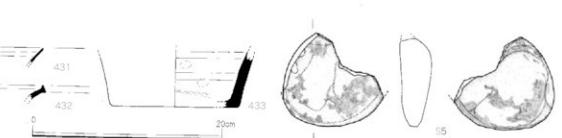


Fig. 28 土坑・ピット出土遺物 (縮尺 = 1 / 4)

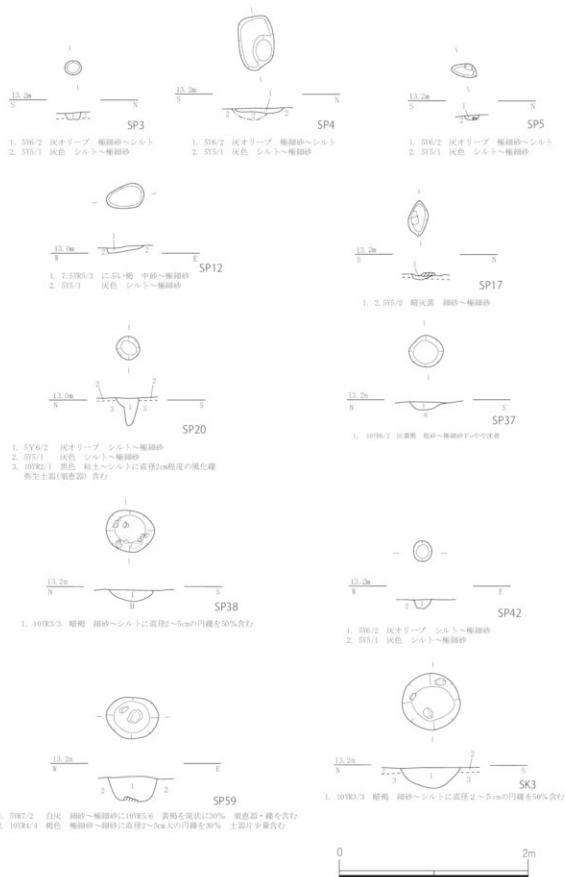


Fig.29 土坑・ピット平・断面図 (縮尺 = 1/40)

小結 まず、遺構面である第1遺構面 (Fig. 5 - F層) の形成時期を検討してみたい。弥生土器は下層からの混入であると考えられる。出土遺物の中で主体を占める須恵器を見ると、型式学的特徴からある程度の時期幅をもつことがわかる。古墳時代的な杯身が残存することから上限は7世紀後半に求められる可能性が高い。一方、本層からは1点であるが縁袖陶器の底部片も出土している。底部片のみであり、詳細な時期比定は困難であるが、底部が削出の凹盤状高台で、白色系の素地に釉調が淡緑色を呈すことから、9世紀代の資料である可能性が高い。その他にも1点のみであるが、培塿も出土している。ただし、この資料は調査時の所見から、近代の搅乱層中にあったものが調査中に混入したものである可能性が高い。従って、主体となるのは7世紀代の須恵器であり、本遺構面の形成時期は概ね7世紀代を中心とし、9世紀代を下限とするものと考えられる。

古代に属するとして報告した遺構は、すべて遺構内からの良好な出土遺物に恵まれず、詳細な時期比定が困難である。出土遺物からその遺構面の形成時期が古代で概ね理解できるが、それ以上の特定はできなかった。

(主要参考文献)

- 佐藤竜馬 1997 「7世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』V・特集7世紀の讃岐。(財)香川県埋蔵文化財調査センター
 佐藤竜馬 2001 「讃岐における7世紀の須恵器」『古代の土器研究』3 ミニシンポジウム四国と岡山の7世紀の土器 第86回研究会報告 古代の土器研究会
 高橋照彦 2003 「平安京近郊の縁袖陶器生産」『古代の土器研究』 平安時代の縁袖陶器・生産地の様相を中心に - 』古代の土器研究会第7回シンポジウム資料

第3節 近世以降 (Fig.31)

調査区中央から東にかけて、大規模削平を免れた一部の地点でいくつか遺構を検出した。いずれも出土遺物が細片であり、時期決定が可能なものではないが、ここで報告する。

(1) 土坑 (Fig.30)

S K 1 調査区中央北側で検出した土坑である。最大幅0.6m、深さ0.2mを測り、埋土は暗褐色シルト～細粒砂で円錐を多く含む。陶器片が一片出土しているが、小片であり詳細は不明である。

S K 2 調査区中央北側、SK 1の南側で検出した土坑である。深さ0.1mとやや浅い。SK 1と同質の埋土であり、土器質の土器小片と陶器片が出土したが、詳細は不明である。

S K 4 SK 1の南に近接して検出した土坑である。上部は搅乱により大きく削平をうけており、深さ5cm程度しか残存していない。埋土中より瓦片が出土した。

S K 5 調査区中央東よりで検出した土坑である。平面形は短辺0.4m、長辺0.6mの隅丸長方形を呈し、埋土にはぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂である。円錐を少量含む。S 5は須恵器の壺底部である。S 5は不明石材である。片面がやや窪んでおり、石台なし柱穴の根石の可能性も考えられる。被然しており、内外面ともに黒色の炭化物が付着している。その他遺物は土器質の土器小片に混じり、陶器片を数点検出したが、細片であり詳細は不明である。

(2) 不明遺構 (Fig.30)

S X 1 調査区東側の、近代以降の搅乱層除去中に検出した遺構である。土師質風呂釜の破片(434)が出土したことと、検出状況で風呂釜を支える裏込めとして機能していたと考えられる粘土～シルト層を検出したことから、風呂跡であると考えられる。搅乱によって削平された状況であった。

小結

調査区は全体的に近代に入って以降大きく削平を受けており、特に調査区東半はその痕跡が顕著である。搅乱層除去中に近世に所属すると考えられる遺物をいくつか検出している。遺構の掘削深度が深いものが部分的に削平を免れたものである。遺構が残存しているのはS 1から東に15～18mの微高地上に限られており、この範囲が近世以降の遺構が集中する地点であると言えるが、搅乱の規模を考えると本来はさらに東西にも広がっていた可能性が高い。

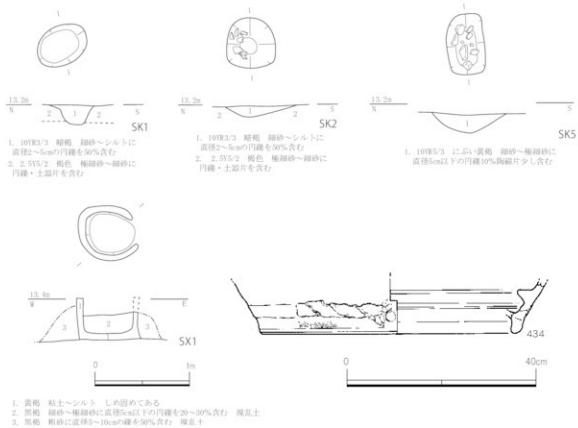


Fig.30 近世以降遺構平・断面図 (縮尺 = 1/40)

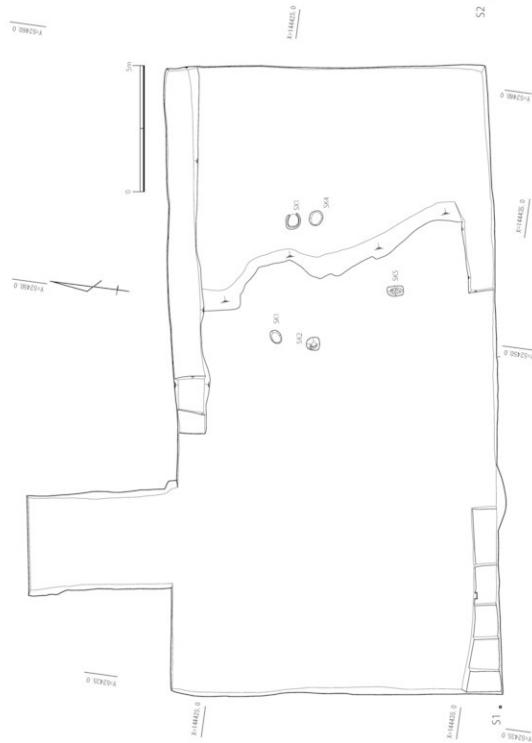


Fig.31 近世以降遺構配置図 (縮尺 = 1/150)

第V章 自然科学的分析

S 1 から東へ 12 m の地点の調査区南壁面を柱状に削り出し、土壤のサンプル採取を行った。土壤サンプルの中でも特に自然河川の堆積層 (Fig. 5 - G・K 層) と土手状遺構 SX 2 の構築土 (10 層・12 層) を対象に、自然科学分析を委託した。周辺の古環境の復元と、稲を含む植物栽培の痕跡を明らかにすることが目的である。結果を以下に記す。

第1節 プラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡（稻作跡）の検証や探査が可能である（藤原・杉山、1984a、杉山、2000）。

2. 試料 分析試料は、Fig. 5 - 10 層、12 层、G 層、K 層から採取された計 4 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法 プラント・オパール分析は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順を行った。

1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）

2) 試料約 1 g に対し直徑約 $40 \mu\text{m}$ のガラスピースを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）

3) 電気炉灰化法 (550°C ・6 時間) による脱水物処理

4) 超音波水中照射 ($300\text{W} \cdot 42\text{KHz} \cdot 10$ 分間) による分散

5) 沈底法による $20 \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去

6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7) 檢鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顯微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

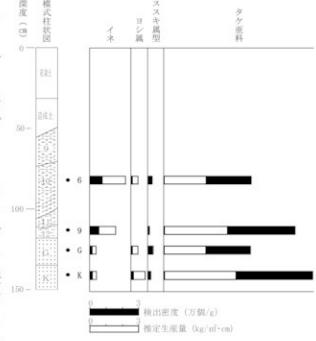


Fig.32 林宗高遺跡におけるプラント・オパール分析結果

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10 - 5\text{ g}$ ）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。

4. 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケア科の主要な 6 分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表 1 および図 1 に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稻作跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1 gあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が 3,000 個/g 程度でも水田跡が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g として検討を行った。

10 層・12 層・G 層・K 層について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、10 層と 12 層では密度が 7,600 個/g やび 5,500 個/g と高い値である。これらの層は土手状遺構の構築土であることから、遺構構築の際に耕作地の土壤が利用された可能性が考えられる。

G 層と K 層では、密度が 1,300 個/g やび 1,400 個/g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類やヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケア科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、各層ともタケア科（おもにネササ節型）が多く検出され、ヨシ属は少量である。おもな分類群の推定生産量によると、各層ともタケア科が優勢となっている。

以上のことから、各層の堆積当時はメダケ属（ネササ節）などの竹節類が多く生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

6.まとめ

プラント・オパール分析の結果、10層と12層ではイネが多量に検出された。これらの層は土手状遺構の構築土であることから、遺構構築の際に耕作地の土壤が利用された可能性が考えられる。また、G層とK層では、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

各層の堆積当時は、メダケ属(ネザサ節)などの竹笹類が多く生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

Tab. 3 林宗高遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料			
分類群	学名	6	9	G	K
イネ	<i>Oryza sativa</i>	76	55	13	14
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7		7	14
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	21	7	26	14
タケソウ科	Bambusoideae	545	818	541	927

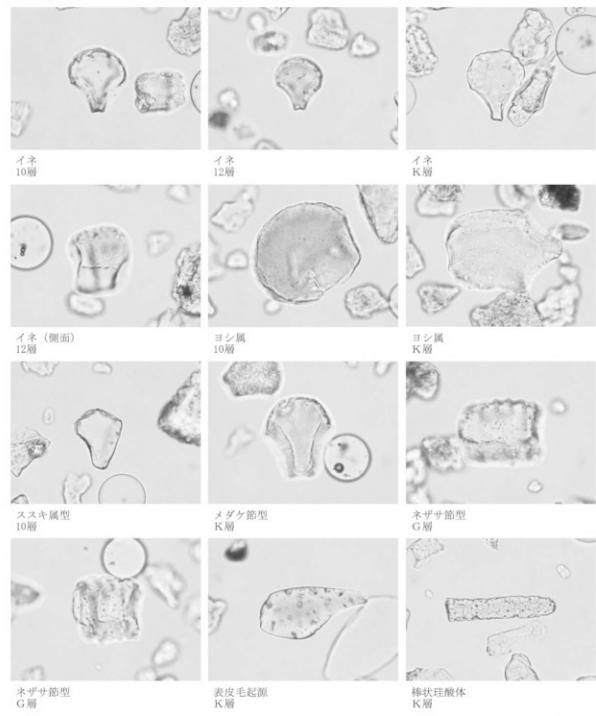
推定生産量 (単位: kg/m²·cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.23	1.60	0.39	0.42
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.44		0.42	0.90
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.26	0.08	0.33	0.18

文献

- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

PL. 3 林宗高遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)



第2節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、Fig. 5 - 10層、12層、G層、K層から採取された計4点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で繅などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルマン氏液を加え 1 分間湯煎）
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入しプレハラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによつて、科、亜科、属、種および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 15、樹木花粉と草木花粉を含むもの 2、草木花粉 20、シダ植物胞子 2 形態の計 39 である。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。分析結果を表 1 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複数管束亞属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アガシ亜属、ニレ属-ケヤキ

[樹木花粉と草木花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、マメ科

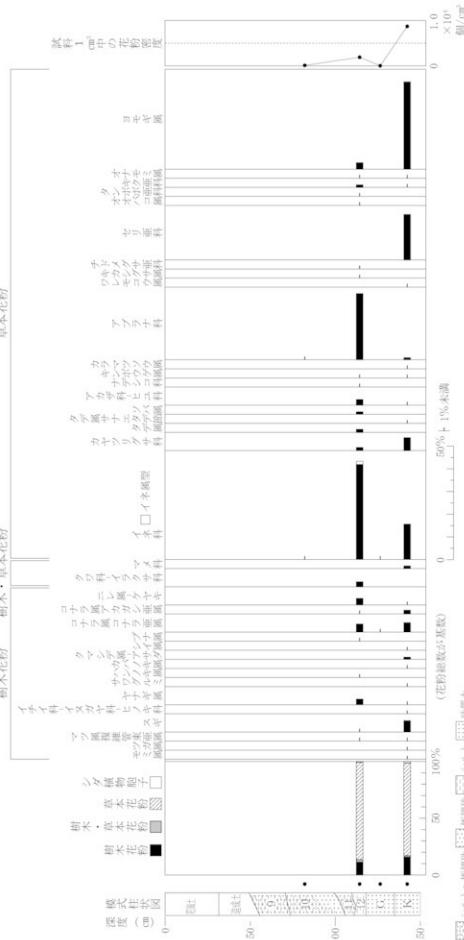


Fig. 33 林宗萬遺跡における花粉ダイアグラム

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、キクシギ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属
[シダ植物胞子]

單条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位のK層では草本花粉の占める割合が約80%を占める。草本花粉ではヨモギ属、セリ亜科、イネ科が優勢で、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉ではスギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。G層では花粉密度が低く、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科がわずかに出現する。12層では草本花粉の占める割合が約85%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科が優勢で、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ属、タデ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、ヤナギ属などが低率に出現する。10層では花粉密度が低く、草本花粉のイネ科、アブラナ科がわずかに出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

下位のK層では、乾燥した環境を好む向陽性草本のヨモギ属、および湿润な環境などやや多様な環境に生育するセリ亜科、イネ科が優勢であり、カヤツリグサ科も認められることから、堆積地はこれらの草本が生育する草地ないし河川の土手のような環境が示唆される。周間に森林は少なく、周辺地域にコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギなどが生育していると考えられる。

G層では、花粉密度が低いことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことや、土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

12層では、栽培植物が含まれるイネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科が優勢であり、ソバ属も認められた。同層は土手状遺構の構築士であることから、遺構構築の際に耕作地の土壤が利用された可能性が考えられる。なおアブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。

10層では、花粉密度が低いことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

〔文献〕

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p248-262。

鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然博物館収蔵目録第5集、60p。

中村純（1967）花粉分析、古今書院、p82-110。

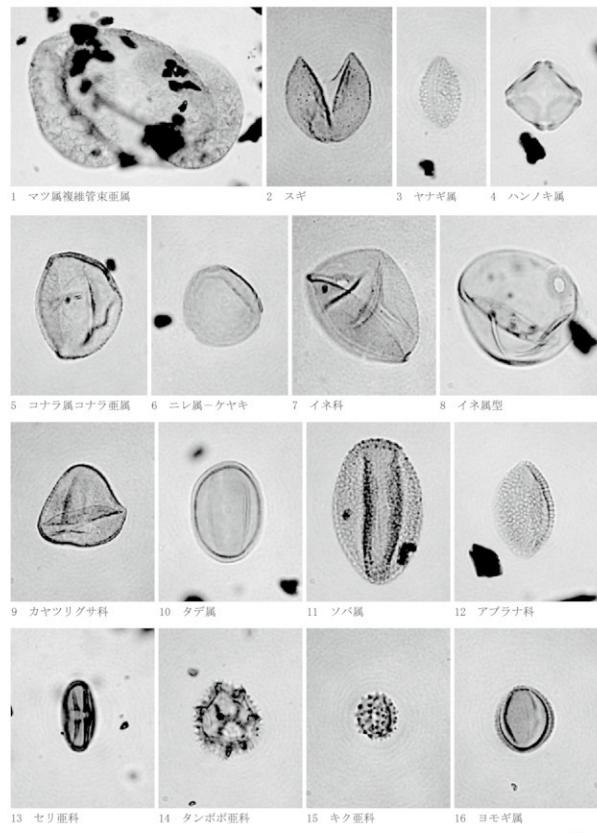
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として、第四紀研究、13p.187-193。

中村純（1977）縦作式イネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。

中村純（1980）日本花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

Tab. 4 林宗高遺跡における花粉分析結果

学名	和名	分類群			
		10層	12層	G層	K層
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属				3
<i>Tsuga</i>	ツガ属				3
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束胚属	2		2	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1		20
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			3	
<i>Salix</i>	ヤナギ属	7		1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ				1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1	
<i>Betula</i>	カバノキ属				1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			4	
<i>Castanopsis</i>	サイ属				1
<i>Fagus</i>	ブナ属	1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	10	1	17	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1		7	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	8		1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	6			
Leguminosae	マメ科				5
Nonarboreal pollen	草木花粉				
Gramineae	イネ科	1	116	2	63
<i>Oryza</i> type	イネ属型		4		
Cyperaceae	カヤツリグサ科		4		23
<i>Polygonum</i>	タデ属		4		
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	3			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	7			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2			
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	1		1	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属			2	
Cruciferae	アブラナ科	17	81	4	
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属				1
<i>Rotula</i>	キカシグサ属	1			
Hydrocotyloideae	チメグサ科			1	
Aipoideae	セリ亞科				81
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2			
Lactuceoideae	タンボボ亜科	2			
Asteroidae	キク亜科	3		1	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	1		1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8		155	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolete type spore	単条溝胞子				5
Trilete type spore	三条溝胞子	2		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	0	31	1	64
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	0	6	0	5
Nonarboreal pollen	草木花粉	18	240	2	334
Total pollen	花粉総数	18	277	3	403
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	1.1	1.9	3.0	8.7
	×10 ⁻²	×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³
Unknown pollen	未定花粉	1	10	2	9
Fern spore	シダ植物胞子	0	2	0	6
Helmint eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細灰化物				(+)



第VI章　まとめ

第1節 古代の遺構と調査地付近の地割

調査区の西半を中心に、第1遺構面を基盤層とする遺構を複数検出した。中でも、溝や柵跡、掘立柱建物跡など、主軸方向の明らかな遺構を見ると、共通して一定の方角を指向していることがわかる。すなわち、溝群は座標方位に対して北15°W (N15°W) 傾いた方角を向いており、なおかつ、SD 1・2と3・4・6は、東西方向にそれぞれ約2.5 mずつを隔てて等間隔に位置する。SD 8は例外的に円弧を描く形状になっているが、他の溝は全て先述の方向を向き、平行している。掘立柱建物SB 1や、柵跡SA 1も、長軸方向を東西にとるもの、溝群にはほぼ直交するかたちで配置している。こうした土地利用の背景には何らかの規制要因が存在したとみるのが妥当であろう。堆積状況や切りあい関係、出土遺物からは、溝群とこれら建物との時間的併行関係を確定することはできないが、当地の土地利用にあたり、一定の方角的な規制が存在したことは明らかである。

古代の高松平野における土地利用の規制要因について、まず想起されるのは条里地割である。林宗高遺跡の立地する高松平野の中央部における条里地割については、過去多くの研究がなされているところである。それらの研究によると、高松平野の条里地割はN 9~12°E傾くことが指摘されている（金田1992）。実際の発掘調査の成果でも、林宗高遺跡近辺では空港跡地遺跡、讃岐弘福寺領比定地、松林遺跡、天満・宮西遺跡などで、条里地割に沿った土地利用の痕跡が窺われる。

今回の調査で検出した遺構の長軸方向と条里地割の方角を比較してみると、角度にして約25°ずれていることがわかる。遺構面出土の遺物から、第1遺構面上の遺構の時期が概ね古代の範疇で捉えることができる事が明らかであるが、当該期には既に高松平野の他の地点では施行されていた条里地割が、今回の調査範囲では遵守されていないことになる。こうした現象の原因の一つとして、自然地形による規制が考えられる。前述の溝や掘立柱建物は、旧河道SR1が埋没し、平坦面が形成された後に開削されたことが明らかになったが、遺構の主軸方向と旧河道SR 1の方向が概ね一致することが指摘できる。本調査地の東側300 mの地点で実施された宗高坊城遺跡の調査（小川・山元編2004）でも、条里地割とは主軸を逸れる遺構が検出され、自然地形の規制による可能性が指摘されている。

本調査地で検出した旧河道SR 1は、最大流域幅が20 m以上を測る河川であり、埋没した後も土地利用に際して何らかの規制要因となったものと考えられる。古代の遺構はこの河川が埋没した後に形成されたと考えられるが、こうした地形的環境により、例外的に条里地割を指向しない土地利用がなされたものと推測できる。ただし、周辺での調査密度はまだ低く、調査の進展を待ち確定したい。

参考文献

- 金田章裕 1992 「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
小川賢・山元敏裕編 2004 「宗高坊城遺跡」高松市教育委員会

第2節 土地利用の変遷

今回の調査では、旧地形の復元の手掛かりとなる情報を入手することができたため、ここで順を追って述べる。

(1) 弥生時代

本遺跡で最も古い生活の痕跡が検出できるのは、弥生時代後期後葉である。調査区の西半で、旧河道 SR 1 下層を検出した。埋没土と出土遺物から、弥生時代後期後葉にかけて、一度埋没したことが判明している。検出面には、細かいクラックが無数に入り、その隙間に砂礫が多く堆積していたことから、地表面に一度露出して干上がった時期があったことが窺われる。調査区の東半では、砂礫層が細かい単位で堆積する様子が検出した。遺構、遺物ともに検出されていないため、弥生時代当に対応するのがどの層であったか厳密に確認する術はないが、調査区西半に流れる旧河道との位置関係と砂礫層からなる堆積状況から、埋没中州・埋没自然堤防で微高地をなすものと考えられる。検出した旧河道の川底の標高は 12.2 m であり、微高地の上面である Fig. 5 - H 1 層の最高所の標高は 13.2 m を測る。以上から、調査区西側には北西方に向かう流れの旧河道が存在し、東側は微高地を形成していたものと考えられる。

当該期の集落は検出しており、生活域がどの範囲に存在したのか明らかでない。ただし、出土遺物の量から近隣に集落の存在が推測され、その候補地としては調査区東側で検出した微高地が有力であると考えられる。

本調査後、平成 21 年 12 月 22 日からの林小学校拡張用地造成工事の立会調査において、同時期の弥生土器を包含した黒色粘土層を検出した (Fig.36)。調査範囲が限られるため、範囲や深さ等は不明であるが、調査区西側で検出した自然河川からさらに東に約 60 ~ 100 m の地点に、別の後背湿地ないし埋没旧河道が存在したことが判明した。S 1 から東へ約 100 m の地点では、この黒色粘土層が緩やかに上がる地点を確認した (Fig.36)。このため、工事立会対象地以東では東に向かって別の微高地が存在したことが推測される。以上の結果から、弥生時代の林宗高遺跡周辺は、複数の微高地が存在し、その微高地と微高地の間に旧河道や後背湿地が存在するという起伏に富んだ地形が復元できる。なお、こうした推定は、(高橋 1992) と矛盾するものではないが、空中写真を基本として復元した高橋の地形復元案と、今回の発掘調査地を重ねたものが、Fig.35 である。高橋の復元を発掘調査によって具体的に明らかにし、部分的に修正することができるものと考えられる。

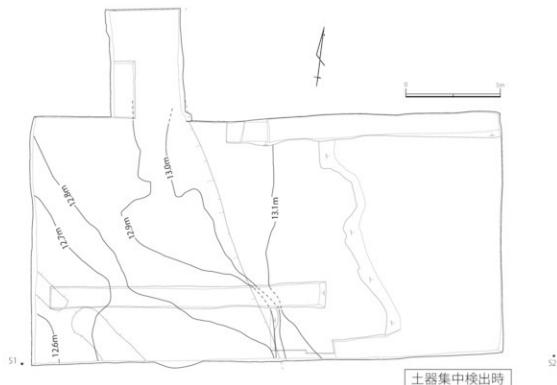
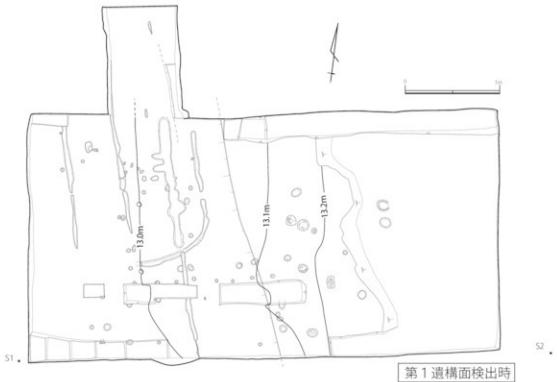


Fig.34 調査区の標高と地形の変化 (縮尺 = 1/300)

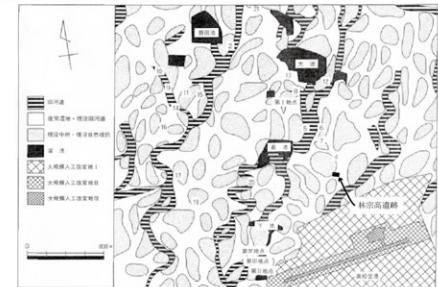


Fig.35 調査地周辺の微地形復元図と林宗高遺跡位置図 (縮尺 = 1/4000) (高橋 1992 に一部加筆)

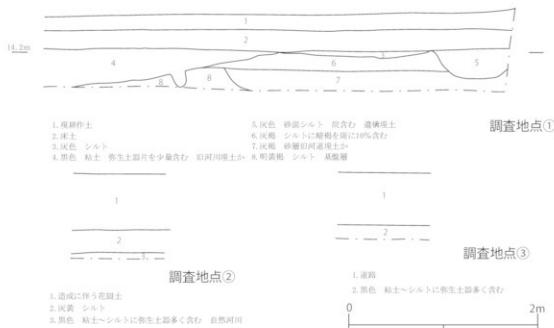
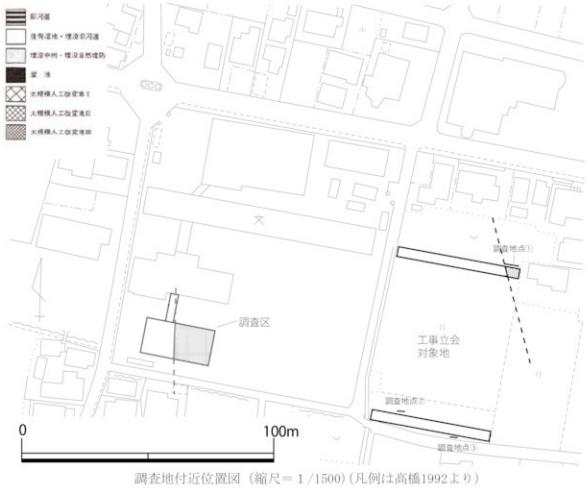


Fig.36 工事立会対象地の調査範囲と調査地周辺の微地形復元

(2) 古代

調査区西半の旧河道 SR 1 が再度埋没し、調査区東側の微高地との比高差が解消され、平坦地が形成されたことが判明した。調査区西端の第1遺構面の上面が標高 130 m、調査区中央で検出した微高地の最高所の標高が 132 m を測る。遺構の検出状況から弥生時代の旧河道が再埋没して平坦地が形成された後、生活空間として利用されたことが判明した。

前節で述べた通り、ここで検出した遺構は条里地割と一致しない事が指摘できる。自然地形が背景として考えられる。

また、所属時期は不明であるが、古代以降に築造された土手状遺構 SX 2 も、概ね旧河道の方位にあわせて造られている。大畦畔等、耕作に関するものか、それとも堤防状の防水機能を果たすものかその役割は不明だが、自然地形を意識した土地利用の痕跡であると考えられる。

調査区東に位置する林小学校拡張用地造成工事に伴う工事立会対象地では、古代の遺構面に対応する層は確認できなかった。須恵器片を 1 点のみ検出しているため、付近に供給源となる集落が存在した可能性が考えられるが、古代の遺構の東側への広がりは現在のところ不明である。

主要参考文献

高橋学 1992 「高松平野の地形環境－弘福寺領山田郡田団比定地付近の微地形環境を中心に－」『諸岐国弘福寺領の調査Ⅱ』 高松市教育委員会

Tab. 5 出土遺物觀察表

文書番号	遺構名	汎用名	種類	位置(cm)	又様・調査		色調	土色	備考	画文書番号	構造名	汎用名	種類	位置(cm)	又様・調査		色調	土色	備考					
					外縁	高さ									外縁	高さ	高さ	外縁	内面					
1	複乱層下	-	土壌層	27.1	(0.4)	-	ナメ,指頭圧	ナメ	明褐色	明褐色	2.5m以下の石	青-灰石,金雲母等	2.5m以下	G	生土	複合土層	24.8	(17.3)	+ナメ,タラバ	ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下,青-灰石,金雲母等	複合層		
2	複乱層下	-	土壌層	延延	-	(8.1)	2.5	ナメ,脚部底部,ナメ,板状	にぶい,ナメ	にぶい,ナメ	3m以下の石	青-灰石と金雲母等	3m以下	X	生土	広口壺	14.8	(8.6)	+ナメ,タラバ	ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	4.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
3	H1層上	-	土壌層	延延	-	2.5	ナメ,脚部底部,ナメ,板状	にぶい,ナメ	にぶい,ナメ	3m以下の石	青-灰石と金雲母等	3m以下	G	生土	広口壺	17.4	(19.4)	+コナメ,タラバ,ナメ,ナメ,板ナメ	+コナメ,タラバ,ナメ,にぶい,角閃石を含む	5.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層		
4	H1層上	-	土壌層	延延	-	4.0	-	-	白	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	10.7	(7.0)	+ナメ,板ナメ	ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
5	H1層上	-	土壌層	延延	-	4.6	4.6	-	-	-	3m以下の石	青-灰石,金雲母等	3m以下	A	生土	広口壺	22.3	(25.0)	+コナメ,ナメ,タラバ,ナメ,のちナメ,指頭圧,ナメ,コナメ	+コナメ,ナメ,タラバ,ナメ,のちナメ,指頭圧,ナメ,コナメ	5.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
6	崩落不明	-	土壌層	延延	28.4	(5.4)	-	ナメ	摩城	にぶい,ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	15.4	(7.1)	+コナメ,タラバ,ナメ,ナメ	+コナメ,タラバ,ナメ,にぶい,角閃石を含む	10.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
7	崩落不明	-	土壌層	延延	-	(5.4)	-	ナメ,指頭圧	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	10.9	(7.0)	+ナメ,ナメ,指頭圧	+ナメ,ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	1.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
8	崩落不明	-	土壌層	延延	-	(2.0)	5.6	ナメ	摩城	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	A	生土	広口壺	13.2	(1.4)	+ナメ	+ナメ	1.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
9	崩落不明	-	土壌層	延延	-	(4.7)	-	ナメ	摩城	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(1.5)	摩城	摩城	1.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
10	崩落不明	-	土壌層	延延	-	(4.4)	-	ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	0.5m以下	青-灰石と金雲母等	0.5m以下	G	生土	広口壺	10.9	(7.0)	摩城	摩城	0.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
11	崩落不明	-	土壌層	延延	-	(7.3)	-	ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	0.5m以下	青-灰石と金雲母等	0.5m以下	G	生土	広口壺	16.4	(2.1)	ナメ	ナメ	0.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
12	SRI下層	N	土壌層	ナメ層	23.0	(2.2)	-	コナメ,ナメ	摩城	にぶい,ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	16.2	(5.7)	+ナメ,指頭圧	+コナメ,ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	方解孔2枚	複合層		
13	SRI下層	G	土壌層	延延	11.8	(4.0)	-	ナメ,ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(5.0)	+ナメ,ナメ,指頭圧	+ナメ,ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
14	SRI下層	E+2	土壌層	延延	-	(4.2)	-	ナメ,ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	13.6	(0.1)	+ナメ,ナメ,指頭圧	+ナメ,ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
15	SRI下層	G	土壌層	延延	-	(3.5)	-	ナメ,ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	14.9	(4.5)	+ナメ,ナメ,指頭圧	+ナメ,ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
16	SRI下層	C	土壌層	延延	-	(1.6)	0.3	ナメ,ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	16.4	(2.1)	+ナメ	+ナメ	3m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
17	SRI下層	C	土壌層	延延	-	(3.6)	-	ナメ,ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(1.3)	+ナメ(摩城),ナメ	+ナメ(摩城),ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
18	SRI下層	H	土壌層	延延	-	(2.0)	8.0	ナメ	ナメ,脚部ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.2	(1.4)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層
19	SRI下層	O+2	土壌層	延延	-	(1.8)	10.5	ナメ,ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(1.9)	+ナメ	+ナメ	0.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
20	SRI下層	O+2	土壌層	延延	-	(1.8)	8.8	ナメ,ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	16.0	(0.6)	+ナメ	+ナメ	1.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
21	SRI下層	H	土壌層	延延	-	(3.6)	-	ナメ,ナメ	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	16.2	(7.0)	+ナメ	+ナメ	4.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
22	SRI下層	不	土壌層	延延	14.4	(2.7)	-	-	摩城	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	16.2	(5.7)	+ナメ,指頭圧	+ナメ,指頭圧,ナメ,にぶい,角閃石を含む	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
23	SRI下層	G	土壌層	延延	23.4	(3.0)	-	皮膚状木本1束1条	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(3.5)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
24	SRI下層	G	土壌層	延延	-	20.6	(4.2)	-	皮膚状木本1束1条	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(3.5)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層
25	SRI下層	T	土壌層	延延	-	(1.7)	14.7	2.7	ナメ	ナメ	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.2	(0.4)	+ナメ	+ナメ	0.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
26	SRI下層	G	土壌層	延延	-	26.0	(2.5)	-	摩城,摩城吹矢文	ナメ	白	1m以下	青-灰石と金雲母等	1m以下	G	生土	広口壺	15.6	(3.5)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層
27	SRI下層	X	土壌層	二重層	-	(2.0)	-	ナメ	ナメ	白	2m以上	青-灰石と金雲母等	2m以上	G	生土	広口壺	15.8	(6.5)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
28	SRI下層	G	土壌層	延延	(15.7)	(11.0)	-	+ナメ,ナメのち,吹矢文	ナメ	ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	17.4	(1.2)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
29	SRI下層	G	土壌層	延延	-	(1.5)	-	コナメ	ナメ	白	2.5m以上	青-灰石と金雲母等	2.5m以上	G	生土	広口壺	17.4	(5.3)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
30	SRI下層	C	土壌層	延延	-	(1.8)	-	-	摩城	ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	17.4	(6.5)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
31	SRI下層	G	土壌層	延延	-	(3.8)	-	+ナメ,ナメ	ナメ	ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	18.0	(3.3)	+ナメ	+ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層	
32	SRI下層	N	土壌層	複合層	-	(9.4)	8.0	-	+ナメ,ナメのち,吹矢文	ナメ	ナメ	2.5m以下	青-灰石と金雲母等	2.5m以下	G	生土	広口壺	18.0	(3.1)	+ナメ,ナメ	+ナメ,ナメ	2.5m以下	青-灰石,金雲母等	複合層